

釣山古墳群発掘調査概報Ⅱ

— 釣山2・34・35号墳の調査 —

1992

鳥取市遺跡調査団

序 文

鳥取市内には数多くの原始・古代遺跡が存在しており、近年の各種開発事業の増加とともに発掘調査が必要となり、消えていく遺跡も増えているのが現状です。しかしながら、埋蔵文化財は地域の先人の生活を語る歴史資料であり、後世に語り継ぎ残していくべき市民の貴重な財産です。このような認識のもと、鳥取市遺跡調査団では開発と文化財の共存をはかるべく、関係各機関の指導を得るとともに地元の方々の深い理解をいただきながら埋蔵文化財調査事業を進めているところです。

さて、今回調査を実施しました釣山古墳群の発掘調査事業は、日本海信販株式会社の計画するスポーツ・レジャー関連施設建設事業にともなって行ったものです。昨年は3基の古墳と各種の遺構が検出され成果をあげることができましたが、引き続き実施した本年の発掘調査でも古墳3基を検出し、ここに無事所期の目的を果たして報告書刊行のはこびとなりました。本報告書は今回の発掘調査の成果を十分に活かしたものとはいえませんが、広範な市民各位による郷土の歴史研究や文化財保護活動の一助としてご活用頂ければ幸いです。

最後になりましたが、本発掘調査を実施するにあたって深いご理解とご協力をいただいた日本海信販株式会社、地元菖蒲地区の方々ならびに関係各機関の皆様にご心から感謝申し上げます次第です。

平成4年3月

鳥取市遺跡調査団

団 長 田 中 哲 夫

例 言

1. 本書は、鳥取市教育委員会の指導・監督のもと、鳥取市遺跡調査団が実施した、釣山2、34、35号墳の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査の期間は、平成3年4月から平成4年3月である。
3. 発掘調査を実施した古墳は、鳥取市菖蒲に所在する。
4. 本書に用いた方位は、遺跡分布図、釣山古墳群分布図を除き磁北を示し、レベルは海拔標高である。
5. 本書の執筆・編集は山田真宏、谷口恭子が担当し、杉谷美恵子が補佐した。
6. 発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。
7. 現地調査および報告書作成にあたって、多くの方々からのご指導・ご助言・ご協力をいただいた。記して感謝いたします。

日本海信販株式会社 大和建設株式会社 鳥取県教育委員会文化課 鳥取県埋蔵文化財センター

本文目次

序文

例言

目次

I	はじめに	1
II	位置と環境	2
III	発掘調査の概要	4
	1. 釣山古墳群	4
	2. 調査の概要	4
	3. 釣山2号墳	6
	4. 釣山34号墳	21
	5. 釣山35号墳	25
	6. 出土遺物	28
IV	おわりに	35

挿図目次

第1図	釣山古墳群周辺主要遺跡分布図	3
第2図	釣山古墳群分布図	4
第3図	釣山2・35号墳地形実測図	7, 8
第4図	釣山2・35号墳墳丘遺存図	9, 10
第5図	釣山2号墳墳丘断面実測図	11, 12
第6図	釣山2号墳第1主体部実測図	13
第7図	釣山2号墳第1主体部出土遺物実測図(1)	14
第8図	釣山2号墳第2主体部実測図	14
第9図	釣山2号墳第1主体部出土遺物実測図(2)	15
第10図	釣山2号墳第2主体部出土遺物実測図(1)	16
第11図	釣山2号墳第2主体部出土遺物実測図(2)	17
第12図	釣山2号墳第2主体部出土遺物実測図(3)	17
第13図	釣山2号墳第3主体部実測図	18
第14図	釣山2号墳第3主体部出土遺物実測図	19
第15図	釣山2号墳墳丘出土遺物実測図(1)	19
第16図	釣山2号墳墳丘出土遺物実測図(2)	20
第17図	釣山2号墳墳丘出土遺物実測図(3)	21
第18図	釣山2号墳墳丘出土遺物実測図(4)	21
第19図	釣山34号墳地形実測図	22
第20図	釣山34号墳墳丘遺存図	23
第21図	釣山34号墳第1主体部実測図	24
第22図	釣山34号墳第2主体部実測図	24
第23図	釣山34号墳出土遺物実測図	25
第24図	釣山35号墳墳丘断面実測図	26
第25図	釣山35号墳出土遺物実測図	27

挿表目次

第1表	釣山古墳群分布図対照表	5
第2表	釣山古墳群調査古墳一覧表	36
観察表		29~34

図 版 目 次

- | | |
|--|------------------------|
| 図版 1 1. 調査地遠景(南東から) | 2. 同(南から) |
| 図版 2 1. 釣山2・35号墳全景(北西から) | 2. 同(南東から) |
| 図版 3 1. 釣山2号墳調査前(西から) | 2. 同表土除去後(西から) |
| 図版 4 1. 釣山2号墳西側溝断面(北から) | 2. 同後円部断面(北西から) |
| 図版 5 1. 釣山2号墳第1主体部断面(北から) | 2. 同完掘後(西から) |
| 図版 6 1. 釣山2号墳第1主体部遺物出土状況(北から) | 2. 同(北から) |
| 図版 7 1. 釣山2号墳第1主体部遺物出土状況(東から) | 2. 同(東から) |
| 図版 8 1. 釣山2号墳第2主体部直上遺物検出状況(西から) | 2. 釣山2号墳第2主体部検出状況(南から) |
| 図版 9 1. 釣山2号墳第2主体部断面(北から) | 2. 同完掘後(西から) |
| 図版10 1. 釣山2号墳第2主体部遺物出土状況(西から) | 2. 同(南から) |
| 図版11 1. 釣山2号墳第2主体部遺物出土状況(南から) | 2. 同(南から) |
| 図版12 1. 釣山2号墳第2主体部遺物出土状況(北から) | 2. 同(西から) |
| 図版13 1. 釣山2号墳第2主体部遺物出土状況(南から) | 2. 釣山2号墳第3主体部完掘後(東から) |
| 図版14 1. 釣山2号墳第3主体部遺物出土状況(東から) | 2. 同(北から) |
| 図版15 1. 釣山2号墳埴輪列検出状況(西から) | 2. 同(東から) |
| 図版16 1. 釣山2号墳埴輪肩部埴輪基部検出状況(南から) | 2. 同(北から) |
| 図版17 1. 釣山2号墳遺物出土状況(南東から) | 2. 同(南から) |
| 図版18 1. 釣山2号墳遺物出土状況(西から) | 2. 同(西から) |
| 図版19 1. 釣山2号墳遺物出土状況(南から) | 2. 同(東から) |
| 図版20 1. 釣山2号墳遺物出土状況(北から) | 2. 同(北から) |
| 図版21 1. 釣山34号墳調査前(西から) | 2. 同調査後(西から) |
| 図版22 1. 釣山34号墳主体部検出状況(左. 第2, 右. 第1主体部/南から) | |
| 2. 同完掘後(左. 第2, 右. 第1主体部/南から) | |
| 図版23 1. 釣山34号墳第1主体部蓋石除去後(東から) | 2. 同墓壇完掘後(北から) |
| 図版24 1. 釣山34号墳第2主体部南側副室(北から) | 2. 同北側副室(北から) |
| 図版25 1. 釣山34号墳第2主体部南側部分(東から) | 2. 同枕石検出状況(北から) |
| 図版26 1. 釣山35号墳調査前(西から) | 2. 同表土除去後(西から) |
| 図版27 1. 釣山35号墳西側溝断面(北から) | 2. 同墳丘断面(北西から) |
| 図版28 釣山2号墳第1主体部出土遺物 | |
| 図版29 釣山2号墳第2主体部出土遺物(1) | |
| 図版30 釣山2号墳第2主体部出土遺物(2) | |
| 図版31 1. 釣山2号墳第3主体部出土遺物 | 2. 釣山2号墳第2主体部直上出土遺物 |
| 3. 釣山2号墳墳丘出土遺物(1) | |
| 図版32 釣山2号墳墳丘出土遺物(2) | |
| 図版33 釣山2号墳墳丘出土遺物(3)(馬形埴輪=a 頭部、b~d 鞍、e・f 脚) | |
| 図版34 1. 釣山2号墳墳丘出土遺物(4)(人物=g 体部、h~j 腕; k 基部; l~n 形象埴輪片) | |
| 2. 釣山35号墳出土遺物 | |

I はじめに

今回発掘調査を実施した釣山2・34・35号墳は、鳥取市菖蒲に所在します。日本海信販株式会社
の計画するスポーツ・レジャー関連施設建設事業に伴って平成2年に第1次調査(釣山22～24号墳)
を行い、今回第2次調査を平成3年4月から実施しました。

第1次調査地は事業地内南東端部の小尾根上に位置しましたが、今回は同事業地内最北部の主稜
線から東に延びる小尾根上と中央部の釣山頂上から東に延びる小尾根上の1次調査地より高所に位
置します。資材などの確保、搬入といった下準備の後、立ち木の伐採、測量杭の設定、水準点の移
動を行い、表土除去作業に取りかかりました。

調査は、調査対象地である開発範囲内最北部の小尾根上の正確な古墳の数と規模の確認、表土除
去範囲の設定のための確認調査をまず行いました。この結果、古墳は当初3基の円墳と考えられて
いたものが前方後円墳1基(2号墳)と円墳1基(35号墳)とからなることがわかりました。とこ
ろが調査にかかってまもなく、範囲内中央部の小尾根上からこれまで知られていなかった方墳1基
(34号墳)が造成工事中に発見されました。このためその対応について関係者による協議を行い、
この方墳についても合わせて調査を行うこととなりました。その際、34号墳の所在地はすでに造成
工事に着手していたこともあって他の古墳の調査を並行して行いながらも優先的に進めていくこと
となりました。

その後調査は3基の古墳の表土除去を順次行ない、各古墳の主体部およびその他の遺構の検出、
掘り下げを行ないました。同時に各調査段階ごとの実測、写真撮影等を行ない正確な記録を作成し
ました。このような中で6月29日には現地説明会を行ない、7月初旬には現地での調査を終了しま
した。

なお、出土した遺物については丁寧に洗浄し、脆いものは薬品で処理したのちに出土位置等を注
記し、現在可能な範囲内で接合・復元を行いました。



調 査 風 景



現 地 説 明 会 風 景

Ⅱ 位置と環境

釣山古墳群の所在する釣山（菖蒲山）は、JR鳥取駅の南西方向約2.6kmの地点に位置する独立丘陵です。中国山地から千代川によって形成された沖積平野に向かって延びる尾根の先端部に位置し、標高約105mを測ります。丘陵の南側には千代川の支流である有富川が流れ、他の三方は水田に囲まれています。この丘陵は、菖蒲、本高、服部の各地区にまたがっており、比較的傾斜の緩やかな東側の菖蒲地区では植林などに利用されていますが、積極的な開発は行なわれていませんでした。周辺一帯の水田や山裾の菖蒲神社、座光寺の静かなたたずまいとあいまって、のどかな田園風景が見られました。しかしながら近年の減反政策による転作、1985年（昭和60）の鳥取国体開催、それと前後する鳥取南バイパスの開通や工業団地の造成にともなうにわかに脚光をあび、開発の波にさらされることとなりました。

古墳群の所在する千代川左岸には、全国的にも著名な原始・古代遺跡の存在が知られています。縄文時代の遺跡としては、古くから知られていた青島遺跡や櫛や舟状木製品等の出土した桂見遺跡、櫛やカゴ、柄杓等の出土した布勢グラウンド遺跡などの低湿地性遺跡ほか、古海遺跡等が知られています。

弥生時代の遺跡としては、縄文時代から引き続き営まれた青島遺跡や古海遺跡のほか、掘立柱建物、溝、土坑、水田跡などの遺構とともに他地域のものも含む土器や木製品が出土した岩吉遺跡、木製品の出土した服部遺跡、山ヶ鼻遺跡、菖蒲遺跡、竪穴住居や貯蔵穴、溝、土坑といった遺構とともに多量の遺物の出土した北村恵儀谷遺跡などの集落遺跡があります。また、弥生時代の墳墓遺跡としては、四隅突出型方形墓が検出された桂見墳墓群が知られているとともに布勢鶴指奥墳墓群が本年度調査されました。

古墳時代に入ると、県東部で最大級の前方後円墳をはじめとした大小様々な古墳が丘陵上に営まれるようになります。そのうちの大部分は小規模な円墳や方墳ですが、大型の古墳として桝間1号墳、布勢1号墳、古海36号墳などの前方後円（方）墳があります。また横穴式石室を持つ後期古墳があまり知られていない鳥取平野西部の中にあって、大きな岩をくり抜いて造った石室を持つ山ヶ鼻古墳や北村の古墳群は貴重な存在となっています。

この地域は律令体制下の因幡国高草郡にあたり、一帯に条里制が施行され後に東大寺領高庭荘として開発が進められていたことが奈良東大寺の古文書から知ることができます。この時期の遺跡としてまず菖蒲廃寺をあげることができます。現在でも塔の心柱を支えた大きな礎石が菖蒲地区西側の水田に残っていて、郡家町の土師百井廃寺と同系の瓦が出土しています。白鳳時代にさかのぼる寺院跡と考えられ、本年度国内最古級の寺院彩色壁画等が出土した淀江町上淀廃寺より少し後のものと考えられています。このほか奈良、平安時代の遺跡として古海遺跡、北村恵儀谷遺跡があり、式内社の大野見宿禰命神社も近くにあります。また、古代山陰道もこの菖蒲地区付近を通過していた

可能性も極めて高いと考えられています。

以上のようにこの地域は古くから政治、経済、文化などの要として位置してきたことをうかがい
 知ることができます。



第1図 釣山古墳群周辺主要遺跡分布図

Ⅲ 発掘調査の概要

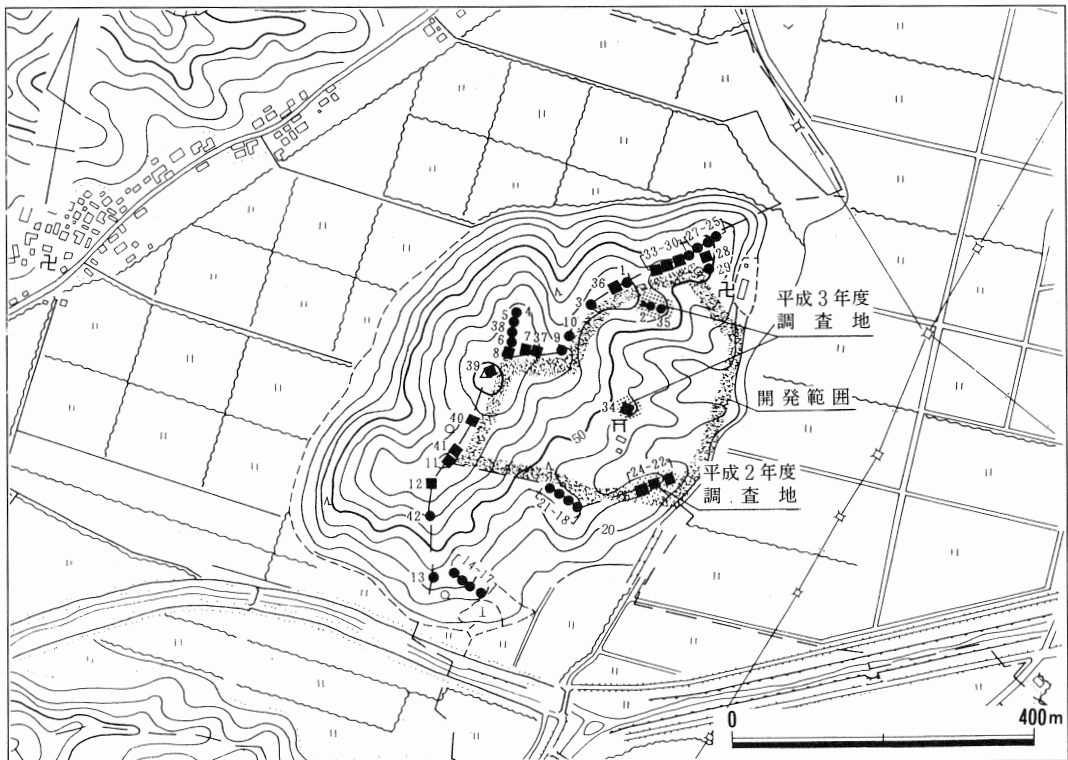
1. 釣山古墳群

釣山の主稜線および支稜線上に造営されている釣山古墳群は、従来は約10m～20m程度の小規模な円墳と方墳（方形墳）を主体とした古墳群と考えられていましたが、今回の発掘調査によって26m強の小規模なものとはいえ前方後円墳も造営されていることがわかりました。また、本古墳群を構成する古墳については、以前は時期や埋葬施設など詳細は不明のままでしたが、昨年度の調査で、前期後半代の古墳が存在し木棺直葬や土器棺といった埋葬施設が存在することが判明しました。また、弥生時代後期の遺構や中世、近世の遺構も存在することが判明しています。

なお、今回の調査までで、本古墳群の古墳の総数は42基となっています。

2. 調査の概要

今回の発掘調査は、釣山古墳群のうち2、34、35号墳を対象として実施しました。2、35号墳は、開発範囲内最北部の主稜線から東に延びる小尾根上の標高60～70m程度の位置に隣接して築造されており、ほぼ同時期のものと考えられます。また34号墳は、昨年度調査した小尾根のすぐ北側で、開発範囲内中央部の釣山頂上から東に延びる小尾根上の45m付近に位置し、他の2基の古墳より古



第2図 釣山古墳群分布図

No	古墳名 遺跡名	墳形	規模(m) 直径×高さ 辺×辺×高	埋葬施設・遺構	出土遺物	県No	備考
1	釣山1号墳	円墳	16.5×1.5			211	
2	釣山2号墳	前方後円墳	全長 26.4 前方部幅 13.7 後円部 17.3×4.3	木棺直葬3、土坑1	表土中・墳丘(円筒埴輪、形象埴輪【馬、人物】、杯蓋、横瓶、甕、石鏃、鉄製品) 主体部(蓋杯、高杯、匙、蓋付台付壺、提瓶、甕、鉄刀、刀子、鉄鏃、耳環、管玉、丸玉、小玉)	212	1991年発掘調査 県の遺跡分布図には5×0.5mの円墳と記載
3	釣山3号墳	円墳	7×1			213	
4	釣山4号墳	円墳	15×2			214	
5	釣山5号墳	円墳	15×1.5			215	
6	釣山6号墳	円墳	13×1.3			216	
7	釣山7号墳	方墳?	13×2			217	
8	釣山8号墳	方墳	10×1			218	
9	釣山9号墳	円墳	14×2			219	西側墳裾に城(砦)跡のものと考えられる石垣あり
10	釣山10号墳	円墳	13×1.8			220	
11	釣山11号墳	方墳	12×1.5			221	
12	釣山12号墳	方墳	10×1			222	
13	釣山13号墳	円墳?	10×1			223	方墳の可能性あり
14	釣山14号墳	円墳	10×1			224	
15	釣山15号墳	円墳	9×0.8			225	
16	釣山16号墳	円墳	7×0.5			226	
17	釣山17号墳	円墳	11×1.5			227	北側1/3崩落
18	釣山18号墳	円墳	12×1.2			228	盗掘穴あり
19	釣山19号墳	円墳	7×0.8			229	盗掘穴あり
20	釣山20号墳	円墳	13×1			230	
21	釣山21号墳	円墳	15×1.5			231	盗掘穴あり
22	釣山22号墳	方形墳	11.5×9.5×1.5	木棺直葬6、土坑1	掘割状溝底(鉋?) 主体部(土師器細片)		1990年発掘調査
23	釣山23号墳	方形墳	6.5×7.5×0.9	木棺直葬1、土器(壺)棺1 土坑2、ピット1	表土中(打製石斧、磨製石斧) 主体部(鉄鏃)		1990年発掘調査、墳頂部から中世の集石遺構1を検出、墳丘南側墳裾部から弥生時代後期の土器(甕)棺1を検出
24	釣山24号墳	方形墳	22×10×0.8	木棺直葬6、土坑1 土坑4、ピット4	表土中(磨製石斧) 主体部(鼓型器台、鉄剣、鉋)		1990年発掘調査、土師器転用枕、南側墳裾部から集石遺構1を検出第6土坑から近世五輪塔2組を検出、墳丘北側から住居跡1を検出
25	釣山25号墳	円墳	12×2				
26	釣山26号墳	円墳	12×2				
27	釣山27号墳	円墳	10×1.5				
28	釣山28号墳	方墳	10×1.2				
29	釣山29号墳	円墳	12×1.2				
30	釣山30号墳	円墳	12×1				
31	釣山31号墳	方墳	12×0.8				
32	釣山32号墳	方墳	20×1				
33	釣山33号墳	方墳	12×1				
34	釣山34号墳	方墳	5.8×-×0.3	木棺直葬、箱形石棺	表土中(須恵器片) 溝底(甕)		1991年発掘調査、造成工事中に見
35	釣山35号墳	円墳	12.6×2.98	主体部流失?、土坑1	表土中(器台、壺、甕、鉄製品)		1991年発掘調査
36	釣山36号墳	方墳	22×0.8				
37	釣山37号墳	方墳	11×1.5				
38	釣山38号墳	円墳	10×1				
39	釣山39号墳	方墳	15×1.5				
40	釣山40号墳	方墳	10×0.8				
41	釣山41号墳	方墳	8×0.8				
42	釣山42号墳	円墳	10×1				

※ 表中の県Noは、「改訂鳥取県遺跡地図第1分冊」(1973年)による。

第1表 釣山古墳群分布図対照表

い時期のものと考えられます。各古墳の形状は、2号墳は前方後円形、34号墳は方形、35号墳は円形となっています。

2号墳からは3基の埋葬施設、34号墳からは2基の埋葬施設が検出されましたが、35号墳からは明確な埋葬施設は検出されませんでした。

出土遺物としては、2号墳から大量の埴輪片とともに蓋杯、高杯、甃、蓋付台付壺、壺、提瓶、横瓶、甕、鉄刀、刀子、鉄鏃、金環、管玉、丸玉、小玉が出土しました。また34号墳からは甕と須恵器片が出土し、35号墳からは2号墳からの転落と考えられる埴輪片とともに須恵器の器台と鉄製品が出土しました。

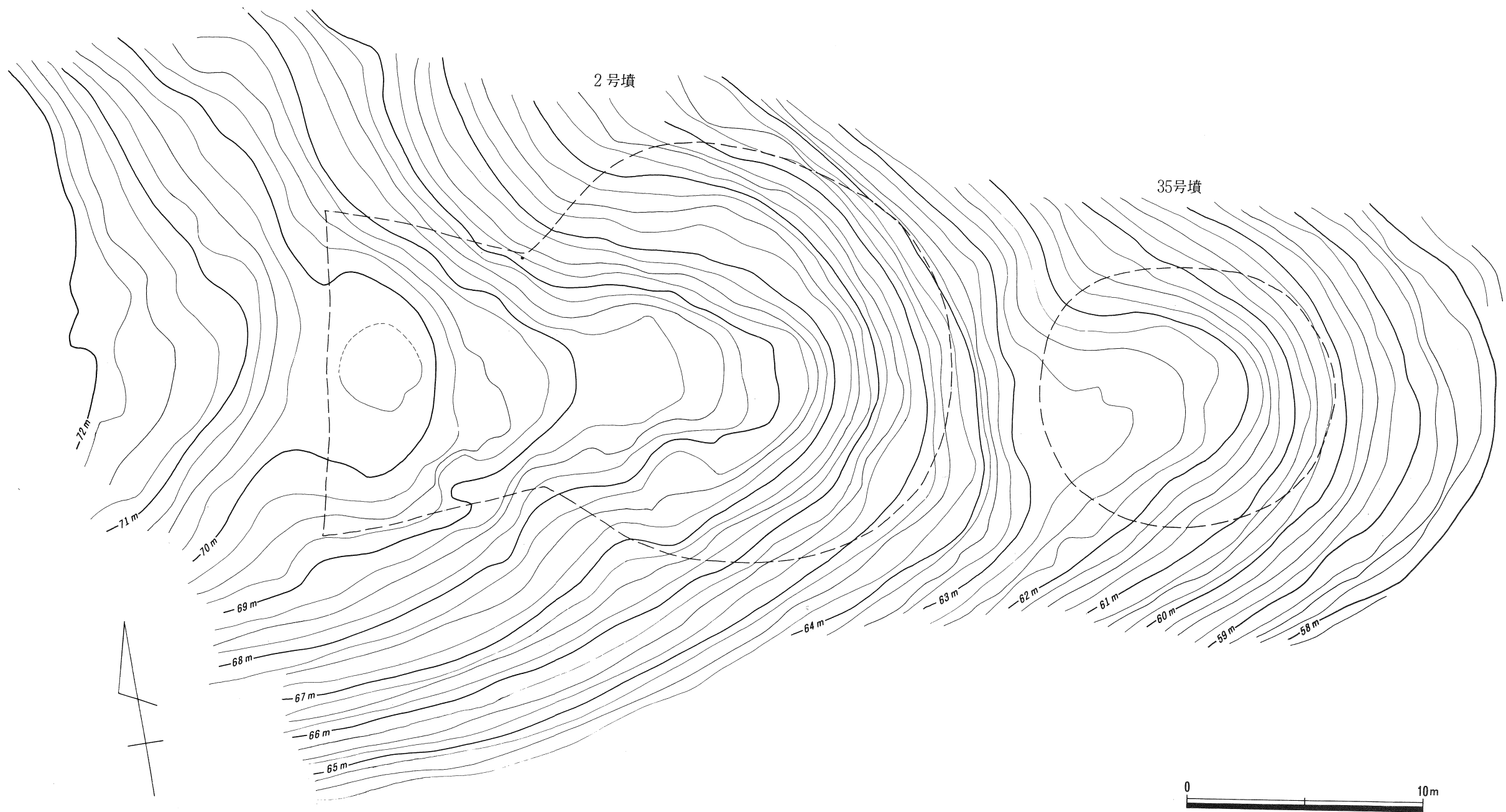
3. 釣山2号墳

【土地と外形】 2号墳は、開発範囲内最北部にある小尾根の最高位から数メートル下った部分に位置し、標高64～70m付近に構築されています。調査前の本墳は『改訂鳥取県遺跡地図第1分冊』（1973年）には直径5m、高さ0.5mの円墳として登録されていましたが、踏査の結果、隣接して若干の高まりが認められたため2基の古墳の可能性が極めて高いとの判断に立って調査を行いました。しかしながら立ち木の伐採の後現地形を詳細に観察したところ、二つの隆起部分の間は東側に向かって低まるものの、鞍部状に連なっている状態が認められました。また、南側の斜面はくびれが少ないものの北側ではかなり明瞭なくびれを持っていたため、視覚的に前方後円墳の可能性が高いと再度判断し直し、それに留意しながら調査杭およびトレンチを設定しました。その結果、本墳は主軸を尾根とほぼ同様のN-79°-Wにとり、尾根の上方側（西側）に前方部を持ち、視界の開ける平野側（東側）に後円部を持つ前方後円墳であることが判明しました。

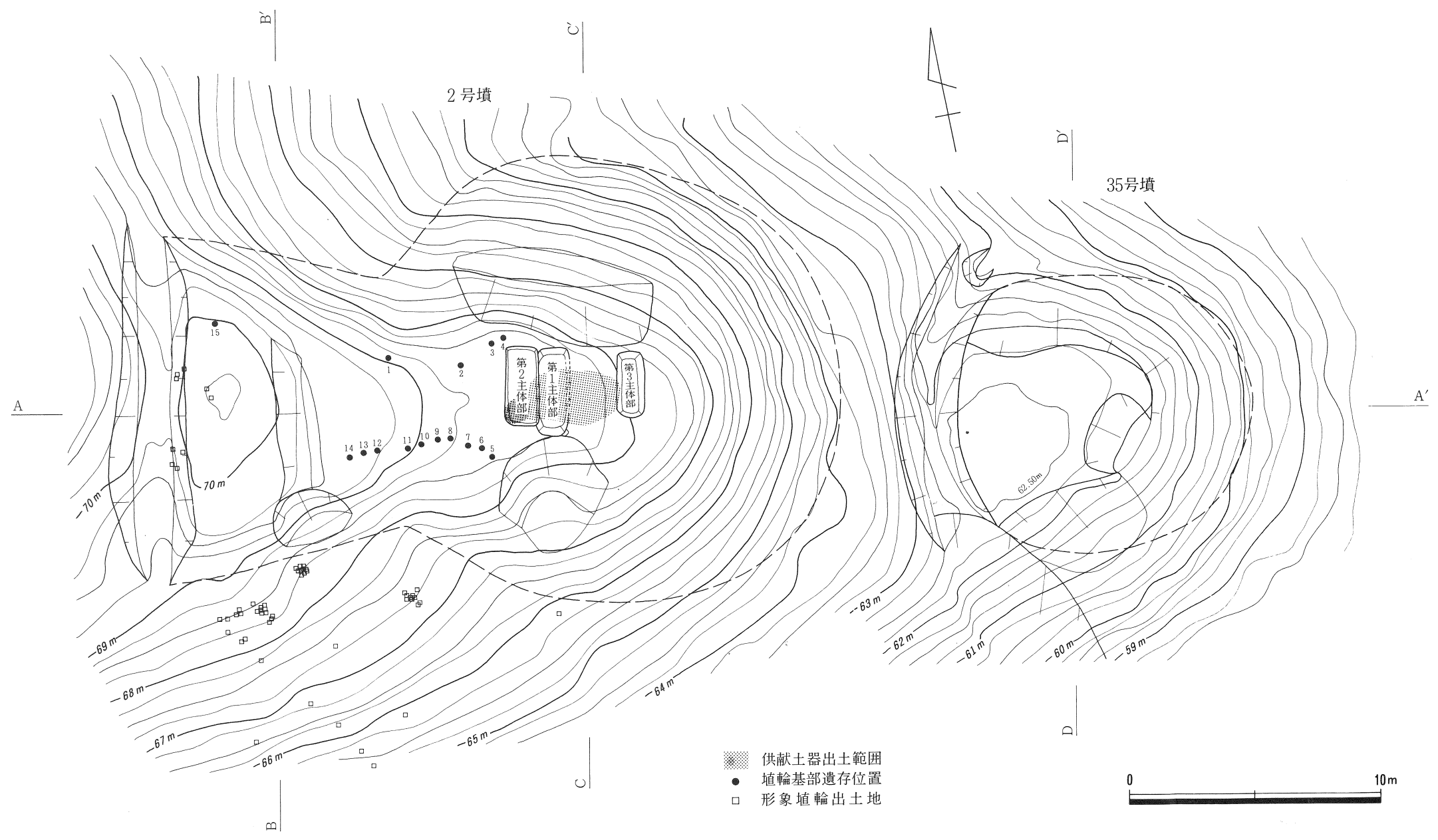
【墳丘】 墳丘は溝の掘り込みと地山の切削加工、盛土を行なって造成しています。溝は前方部西側裾部（尾根の上方側）のみに掘り込まれており、墳丘主軸ライン上で幅2.8m、深さ0.4mを測ります。

盛土は、本来墳頂部にあったと考えられる埴輪や土器の破片が墳丘斜面や墳裾、それ以外に流れ落ちていることから、かなりの部分が流失していると考えられます。ただ後円部は比較的遺存状態が良好で、墳丘基底面からの盛土の高さは最も深いところで約1.95mを測ります。そのほかの規模は、全長26.4m（前方部西側溝底から後円部東側墳裾）、前方部幅13.7m（北側墳裾コーナーから南側墳裾コーナー）、後円部径17.3m（北側墳裾から南側墳裾）、後円部高4.3m（北側墳裾から後円頂部）を測ります。

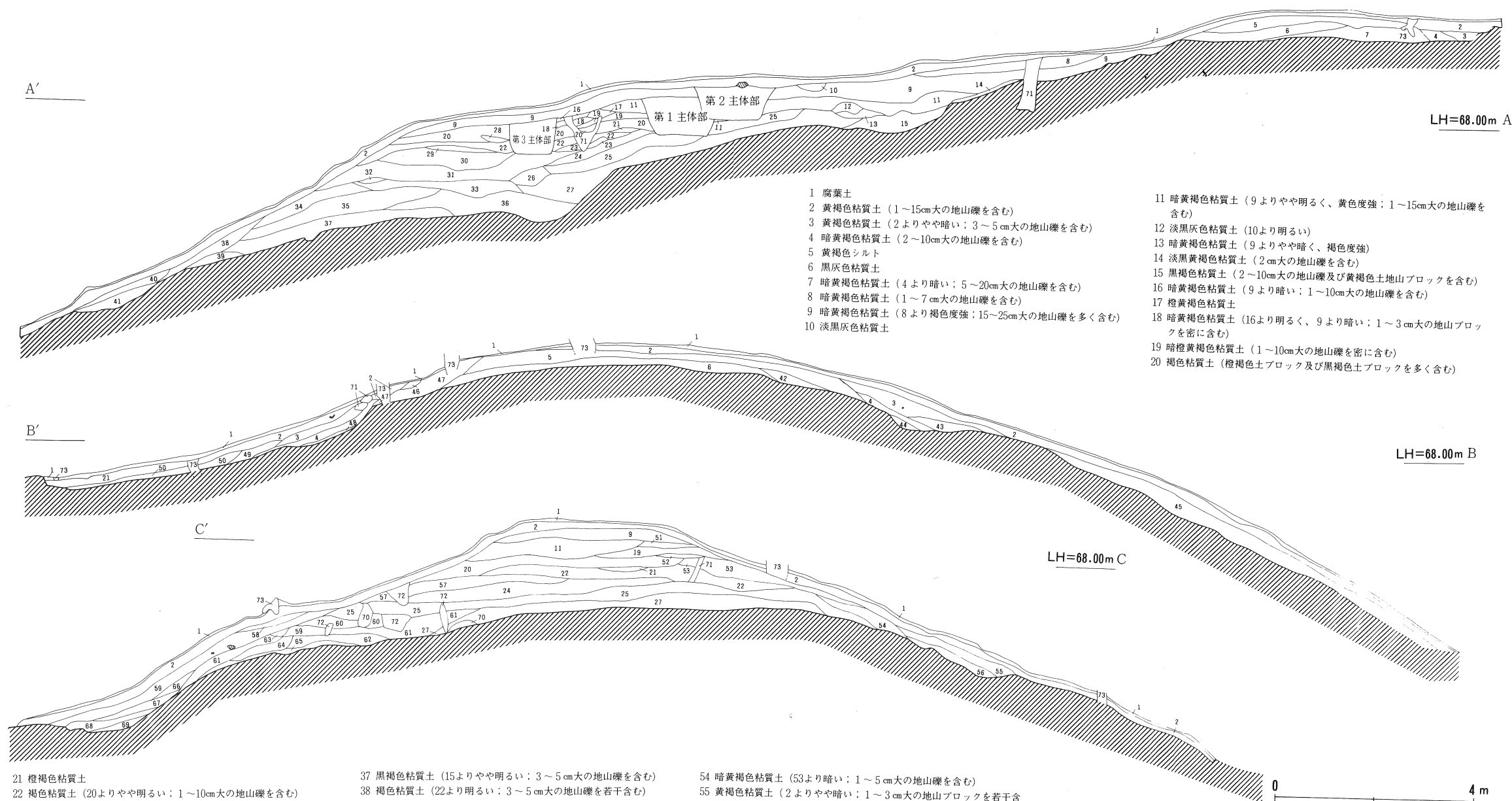
なお墳丘縦断面の観察によると、前方部と後円部の境界部および後円部中央部付近の墳丘基底面には落ち込みが認められました。しかしこれらは本墳築造以前の古墳の周溝、本墳築造時の区画溝あるいは埋没周溝、その他の遺構の存在を積極的に示すとは考えられず、また他に関連する何の証左も認められませんでした。



第3図 釣山2・35号墳地形実測図



第4図 釣山2・35号墳墳丘遺存図



LH=68.00m A

LH=68.00m B

LH=68.00m C

- 1 腐葉土
- 2 黄褐色粘質土 (1~15cm大の地山礫を含む)
- 3 黄褐色粘質土 (2よりやや暗い; 3~5cm大の地山礫を含む)
- 4 暗黄褐色粘質土 (2~10cm大の地山礫を含む)
- 5 黄褐色シルト
- 6 黒灰色粘質土
- 7 暗黄褐色粘質土 (4より暗い; 5~20cm大の地山礫を含む)
- 8 暗黄褐色粘質土 (1~7cm大の地山礫を含む)
- 9 暗黄褐色粘質土 (8より褐色度強; 15~25cm大の地山礫を多く含む)
- 10 淡黒灰色粘質土
- 11 暗黄褐色粘質土 (9よりやや明るく、黄色度強; 1~15cm大の地山礫を含む)
- 12 淡黒灰色粘質土 (10より明るい)
- 13 暗黄褐色粘質土 (9よりやや暗く、褐色度強)
- 14 淡黄褐色粘質土 (2cm大の地山礫を含む)
- 15 黒褐色粘質土 (2~10cm大の地山礫及び黄褐色土地山ブロックを含む)
- 16 暗黄褐色粘質土 (9より暗い; 1~10cm大の地山礫を含む)
- 17 暗黄褐色粘質土
- 18 暗黄褐色粘質土 (16より明るく、9より暗い; 1~3cm大の地山ブロックを密に含む)
- 19 暗黄褐色粘質土 (1~10cm大の地山礫を密に含む)
- 20 褐色粘質土 (橙褐色土ブロック及び黒褐色土ブロックを多く含む)

- 21 橙褐色粘質土
- 22 褐色粘質土 (20よりやや明るい; 1~10cm大の地山礫を含む)
- 23 淡黄褐色粘質土
- 24 暗黄褐色粘質土 (1~15cm大の地山礫及び地山ブロックを含む)
- 25 黒黄褐色粘質土 (5~15cm大の地山礫を密に含む)
- 26 褐色粘質土 (黒灰色土ブロックを含む)
- 27 黒灰褐色粘質土 (5~20cm大の地山礫を密に含む)
- 28 橙褐色粘質土
- 29 橙粘質土 (黒灰色土ブロックを含む)
- 30 黒灰色粘質土 (黄褐色土ブロックを含む)
- 31 褐色粘質土 (20よりやや明るく、22より暗い; 10~20cm大の地山礫及び黄褐色土ブロック、橙褐色土ブロックを若干含む)
- 32 橙粘質土 (黒灰色土ブロックを含む)
- 33 黒灰色粘質土 (30よりやや暗い; 3~7cm大の地山礫を含む)
- 34 暗黄褐色粘質土
- 35 黄褐色粘質土 (3~20cm大の地山礫を多く含む)
- 36 暗黄褐色粘質土 (24より暗い; 黒褐色土ブロックを含む; 3~15cm大の地山礫を密に含む)
- 37 黒褐色粘質土 (15よりやや明るい; 3~5cm大の地山礫を含む)
- 38 褐色粘質土 (22より明るい; 3~5cm大の地山礫を若干含む)
- 39 淡灰褐色粘質土 (2~5cm大の地山礫を含む)
- 40 明橙黄褐色粘質土
- 41 淡黄褐色粘質土
- 42 褐色シルト
- 43 暗黄褐色粘質土 (4よりやや明るい; 2~3cm大の地山礫を若干含む)
- 44 暗黄褐色粘質土 (4より暗い; 2~3cm大の地山礫及び炭化物を若干含む)
- 45 暗黄褐色粘質土 (43より明るい; 5~20cm大の地山礫を多く含む)
- 46 暗褐色シルト
- 47 褐色シルト
- 48 淡黒褐色粘質土
- 49 暗黄褐色粘質土 (4より明るい; 3~10cm大の地山礫を含む)
- 50 暗黄褐色粘質土 (49よりやや明るい; 1~5cm大の地山礫を含む)
- 51 暗黄褐色粘質土
- 52 黒褐色粘質土
- 53 暗黄褐色粘質土 (1~5cm大の地山礫を含む)
- 54 暗黄褐色粘質土 (53より暗い; 1~5cm大の地山礫を含む)
- 55 黄褐色粘質土 (2よりやや暗い; 1~3cm大の地山ブロックを若干含む)
- 56 黄褐色粘質土 (55よりやや暗い)
- 57 暗褐色粘質土 (1~10cm大の地山礫を含む)
- 58 褐色粘質土 (20より明るい; 1~10cm大の地山礫を含む)
- 59 褐色粘質土 (20より明るく、58よりやや暗い; 1~5cm大の地山礫を含む)
- 60 暗黄褐色粘質土 (1~2cm大の地山ブロックを含む)
- 61 淡黒褐色粘質土と暗黄褐色粘質土の混合
- 62 黒褐色粘質土 (1~10cm大の地山礫を含む)
- 63 暗黄褐色粘質土
- 64 暗黄褐色粘質土 (60よりやや暗い; 黒褐色土ブロック及び地山ブロックを含む)
- 65 暗黄褐色粘質土 (60より明るい)
- 66 明黄褐色粘質土
- 67 黄褐色粘質土 (2より暗い; 淡黒褐色土ブロック及び橙褐色土ブロックを含む)
- 68 淡黒褐色粘質土 (1~6cm大の地山礫を含む)
- 69 明黄褐色粘質土 (66より明るい; 1~4cm大の地山礫を含む)
- 70 黄褐色粘質土
- 71 暗黄褐色粘質土 (木根等による攪乱土)
- 72 褐色粘質土 (木根等による攪乱土)
- 73 木根

第5図 釣山2号墳墳丘断面実測図

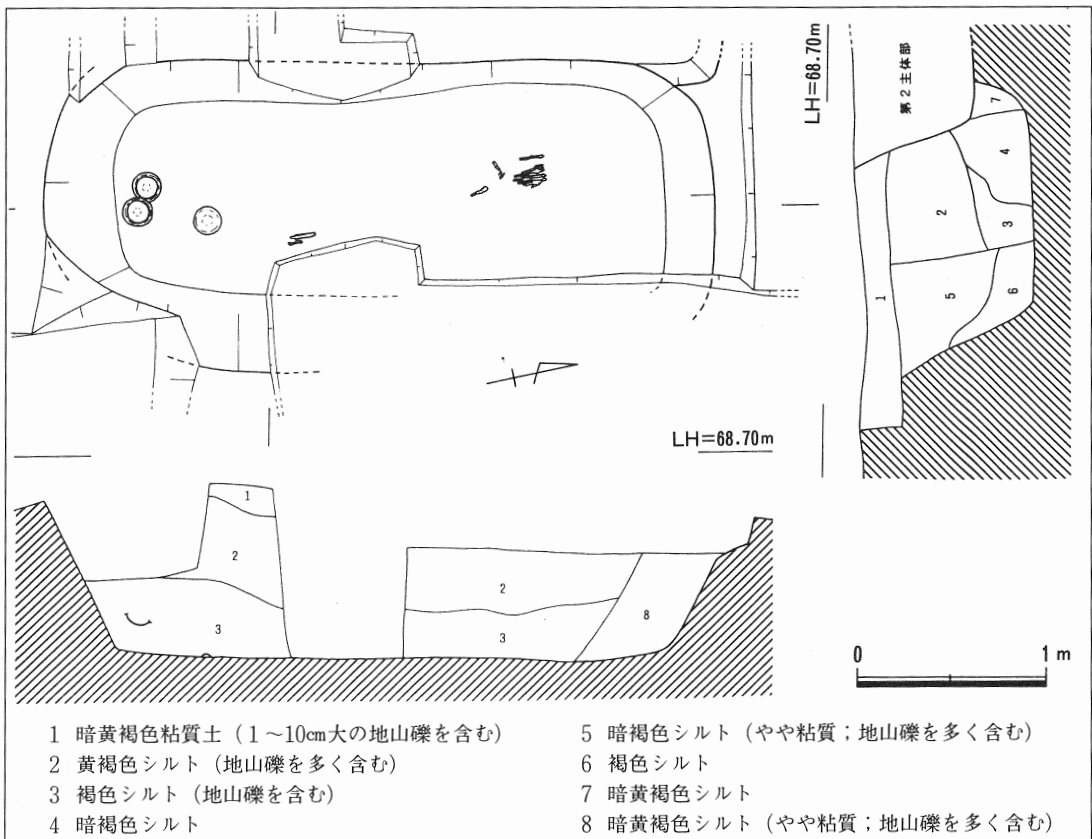
埋葬施設等

埋葬施設は後円部から木棺直葬と考えられる土壙墓を計3基検出しました。墳頂面の精査の段階では墓壙掘り方の検出が困難だったため、段階的にトレンチを掘り下げるとともに拡張して断面を観察することで各主体部を検出しました。このうち第2主体部は遺存盛土上面から検出され、第1・第3主体部は盛土中位層の上面から検出されました。このことは第1・第3主体が埋葬されその上に盛土がなされたのちに、墳丘完成後かどうかは盛土が流失しているため明確ではありませんが、さらに第2主体が埋葬されたことを表しています。

各墓壙の平面形はいずれも隅丸方形を呈しており、主軸を南北方向にとって、第1主体部と第2主体部は墓壙長辺の一部を切り合って、また第3主体部は第1主体部の東側約2mの位置に掘り込まれています。

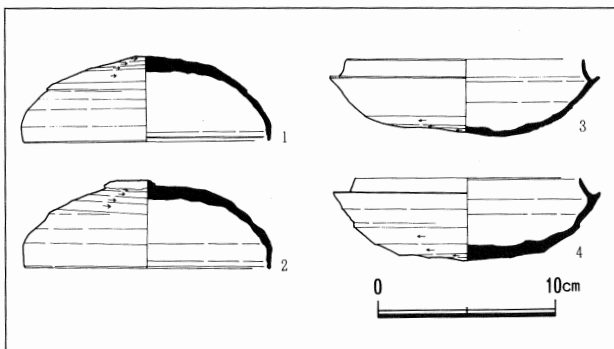
第1主体部の墓壙は、検出長3.56m、同幅1.64m、深さ0.78mを測ります。壁部は上方へゆるやかに開きながら立ち上がり、四隅の稜は鈍くなっています。また、前述のとおり西側の壁部の一部が後に掘り込まれた第2主体部によってカットされています。

本主体部の中からは、墓壙南端の褐色シルト(3)層および床面直上から蓋杯が出土し、そのうちの杯蓋1点には内面に朱(ベンガラ?)が塗布してありました。また、墓壙南側約1/3のやや



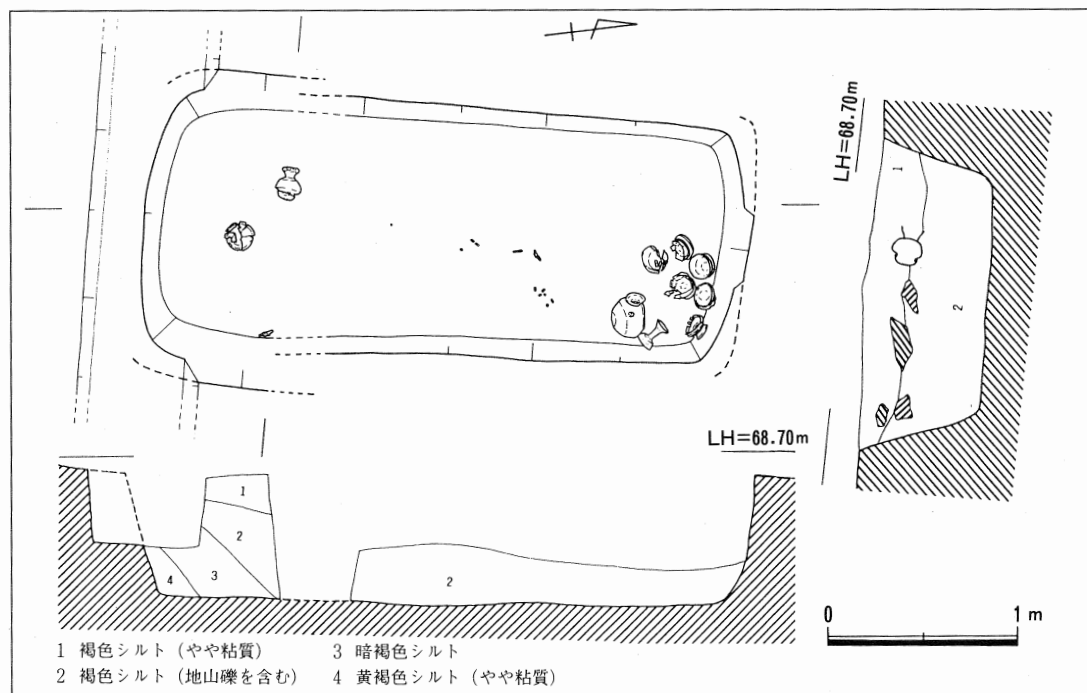
第6図 釣山2号墳第1主体部実測図

東よりの床面直上から鉄刀・刀子が、墓壙北側約1/3付近の床面直上から鉄鏃が出土しました。第2主体部の墓壙は、検出長3.24m、同幅1.68m、同深さ0.67mを測ります。壁部は上方へ鋭角に立ち上がり、四隅の稜は第1主体部に比べて鋭くなっています。

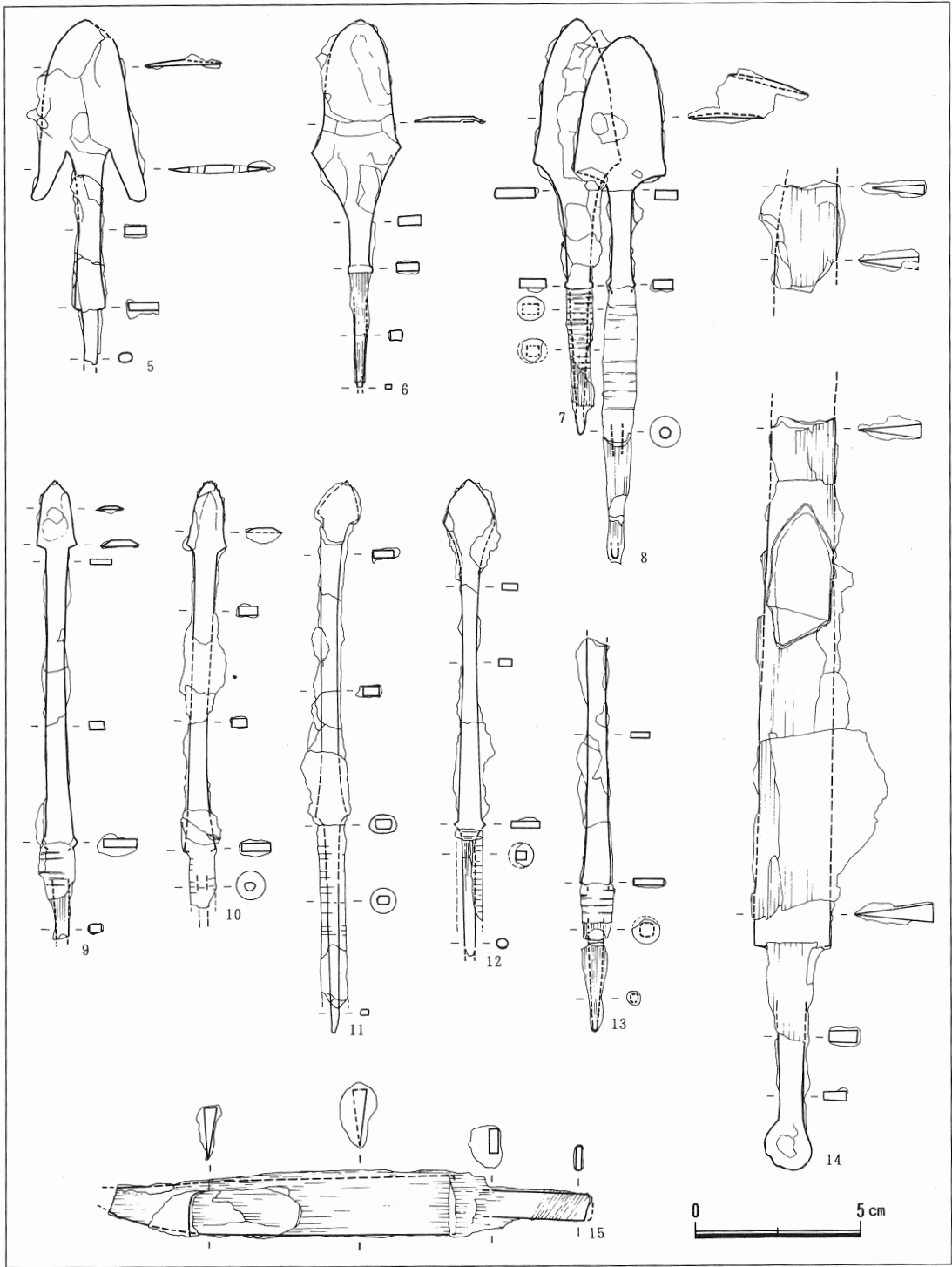


第7図 釣山2号墳第1主体部出土遺物実測図(1)

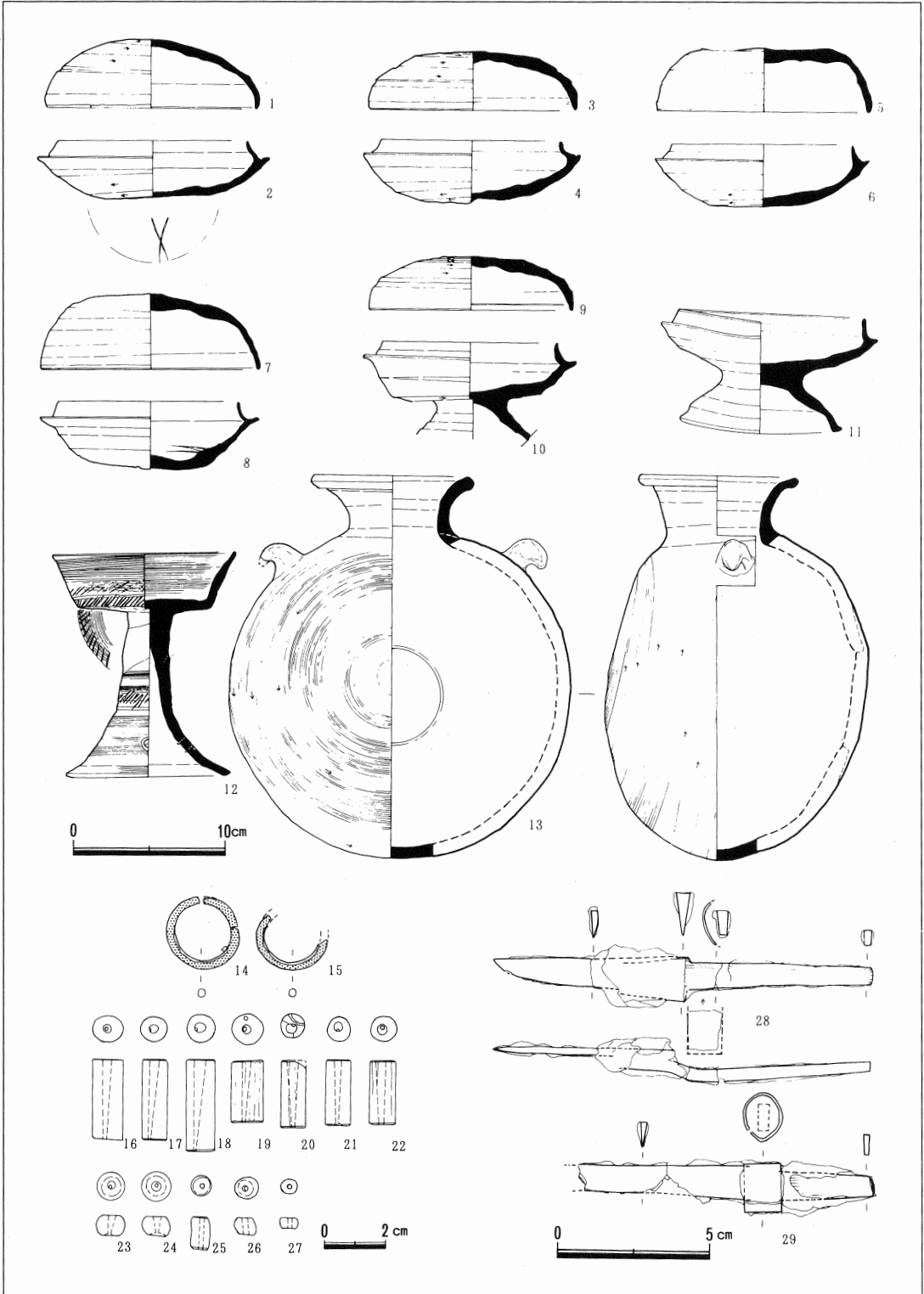
本主体部からは、中央部より若干南側の墓壙直上から供献用と考えられる甕が出土しました。主体部内部からは墓壙南側の褐色シルト(1)および褐色シルト(2)層中から蓋付台付壺・蓋杯が浮いた状態で出土し、また墓壙南東側の褐色シルト(2)層中から刀子・耳環が出土しました。さらに中央部からやや北側にかけての床面直上から玉類・刀子が出土し、北東端部の褐色シルト(2)層から床面にかけて蓋杯・高杯・提瓶が出土しました。このうち南側出土の蓋付台付壺と蓋杯はきちんと蓋をした状態で検出され、北東側出土の蓋杯と高杯のうちのセットになっていたものは蓋の内面を上にして重ねた状態で検出されました。



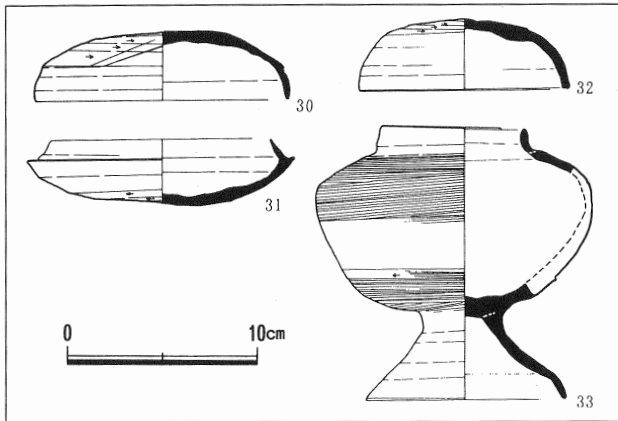
第8図 釣山2号墳第2主体部実測図



第9图 鈞山2号墳第1主体部出土遺物実測図(2)

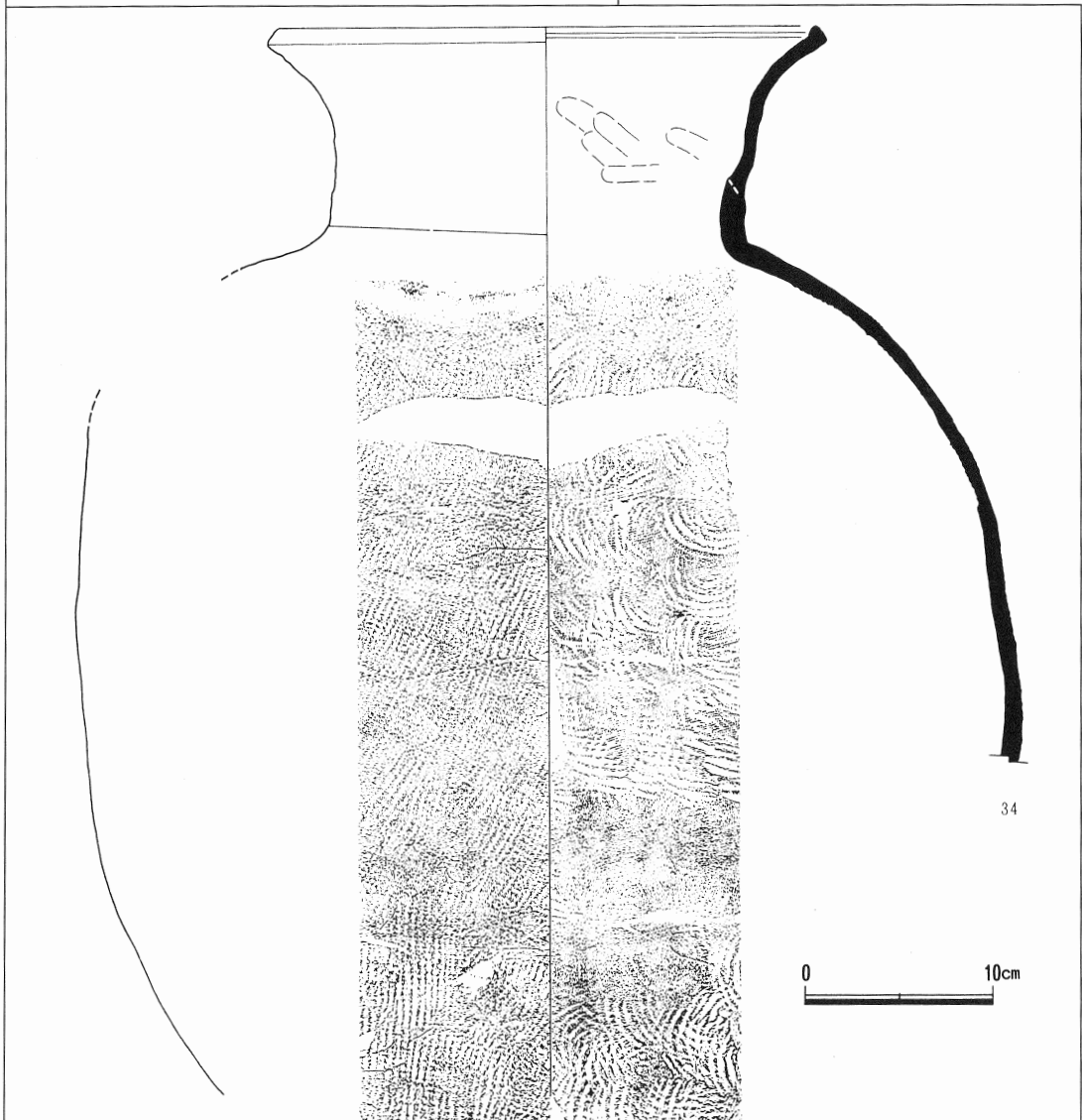


第10图 釣山2号墳第2主体部出土遺物実測図(1)



第11图

釣山2号墳第2主体部出土遺物実測図(2)



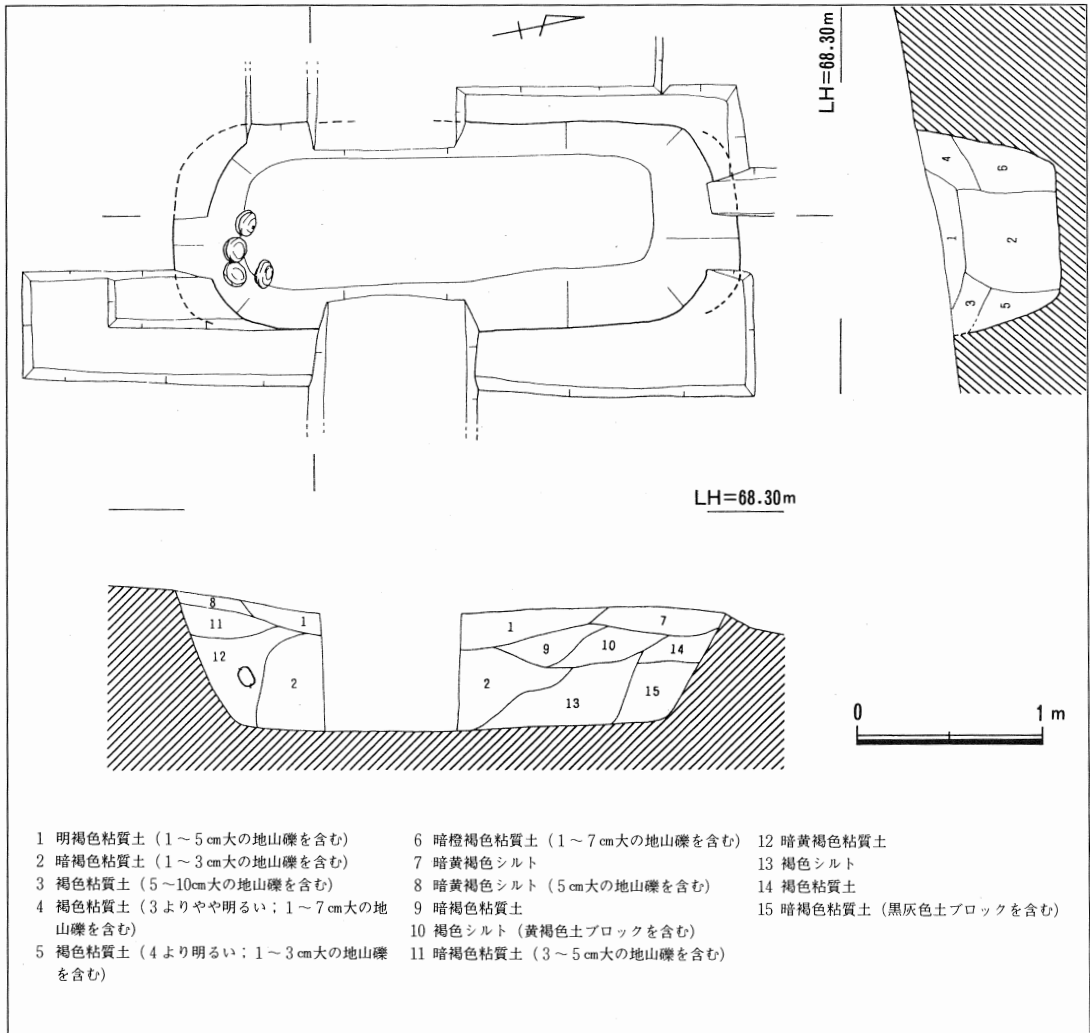
第12图 釣山2号墳第2主体部出土遺物実測図(3)

第3主体部の墓壙は、検出長3.07m、同幅1.10m、同深さ0.82mを測ります。壁部は上方へ鋭角に立ち上がり、四隅の稜は第1主体部に比べて鋭くなっています。

主体部からは墓壙検出面の南側で、上層の暗黄褐色粘質土層から土師器高杯・甕が出土しました。供献用の遺物の可能性が高いと考えられます。また主体部内からは墓壙南端部の暗黄褐色粘質土(12)層から蓋杯が3セット出土しました。さらに墓壙南側の床面直上からガラス小玉が出土しています。このうち蓋杯については、その出土状況から本来は各セットともきちんと蓋をした状態で置かれていたと考えられ、そのうちの杯身の1つが後に転落したものと考えられます。

なお前方部墳頂部中央よりやや南側から後世のものと考えられる土坑1が検出されました。

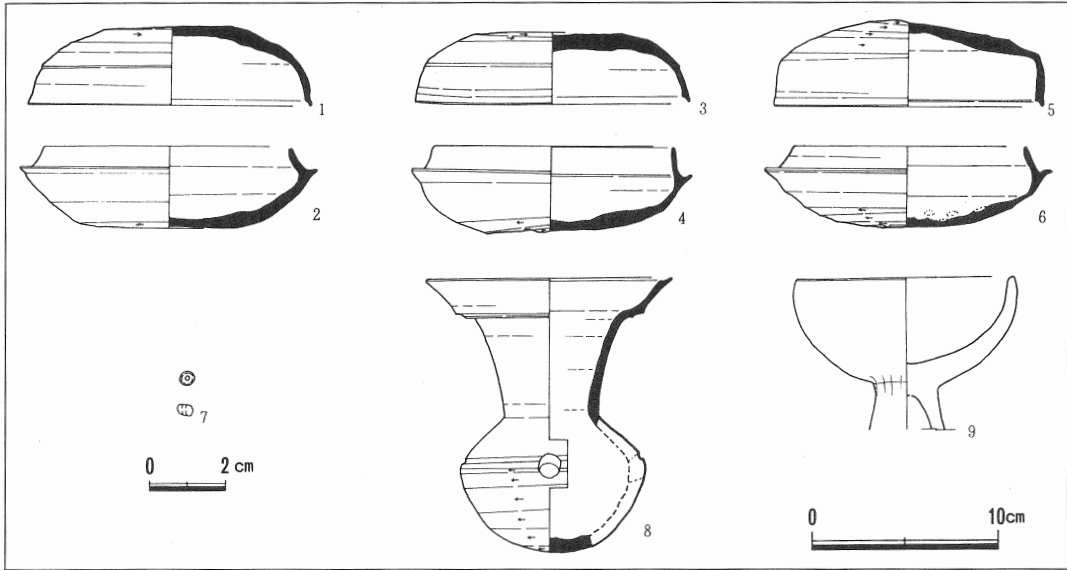
埋葬施設以外の遺物出土状況 本墳からは大量の円筒埴輪が出土しましたが完全な形を保って出土したものはなく、ほとんどが小さな破片となって本墳をほぼ一周する形で墳丘斜面や墳裾、あるいは



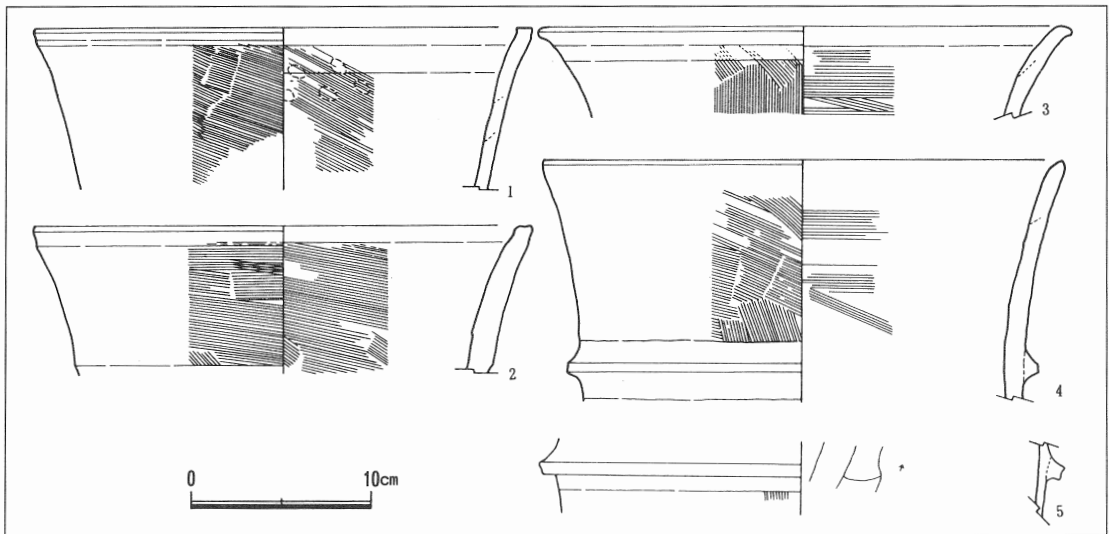
第13図 釣山2号墳第3主体部実測図

は墳丘外まで流出していました。ただそんな中でほぼ原位置を保っていると考えられる基部15基が墳丘肩部から検出できました。（前方部西側1基、北側くびれ部4基、南側くびれ部10基）いずれも埋置した際の土坑は確認できませんでしたが、中のいくつかには直径10~20cm前後の地山礫が埴輪の中や外に埴輪を固定するように配置されていました。

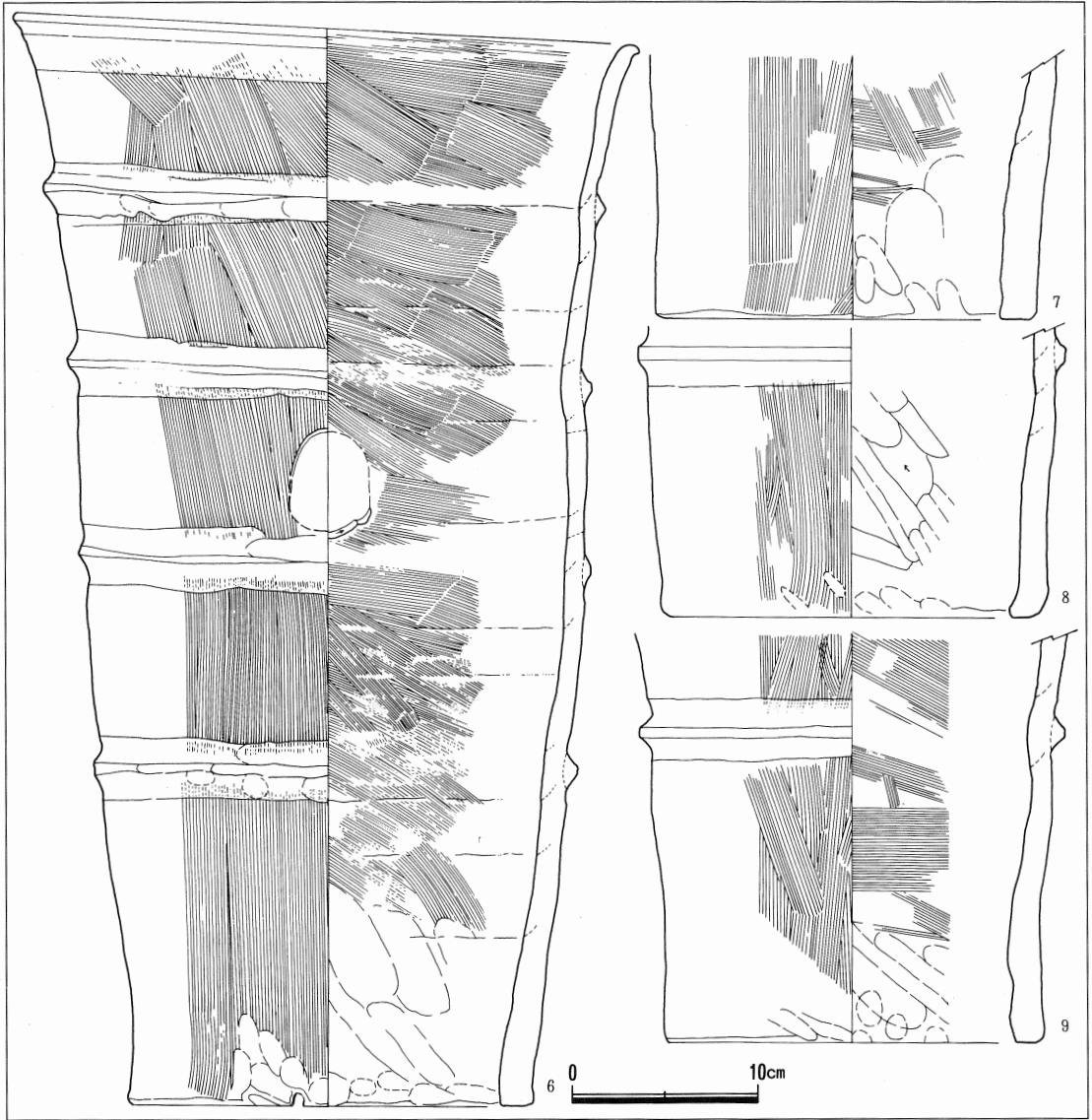
また本墳からは形象埴輪も出土しています。原位置を保っているものはなくほとんどが墳裾や墳



第14図 釣山2号墳第3主体部出土遺物実測図



第15図 釣山2号墳墳丘出土遺物実測図(1)

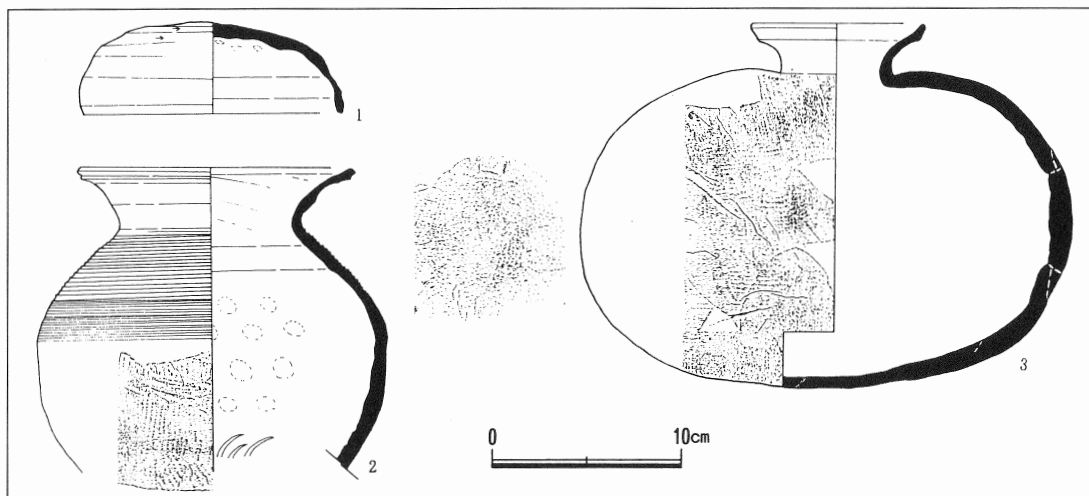


第16図 釣山2号墳墳丘出土遺物実測図(2)

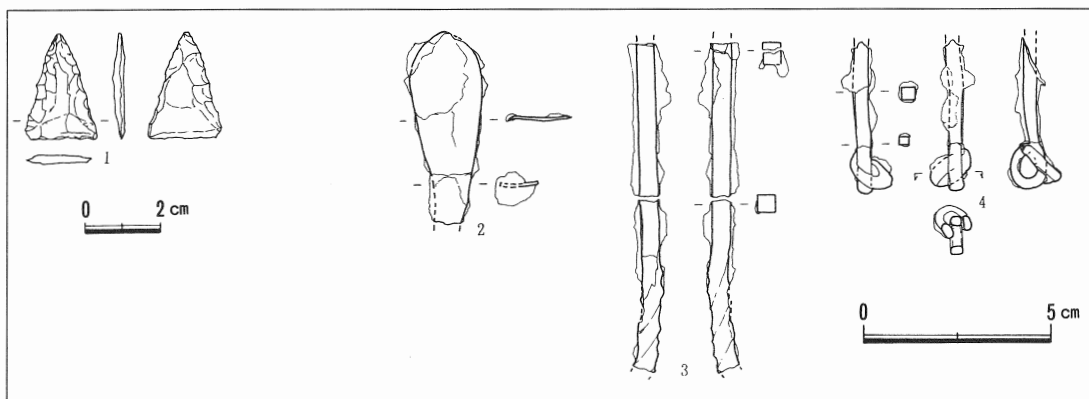
丘外まで流出していますが、その出土位置は前方部の南西および南側に集中しているといえます。詳細不明のものを除くとそのほとんどが馬形埴輪か人物埴輪の破片となっています。

次に須恵器ですが、北側くびれ部墳丘肩部から壺1点と横瓶1点が、また前方部北側墳丘外から杯蓋1点が出土しています。

なお前方部墳頂部中央よりやや南側から検出された土坑付近から石鏃1点と詳細不明の鉄製品2点が出土しています。



第17図 釣山2号墳墳丘出土遺物実測図(3)

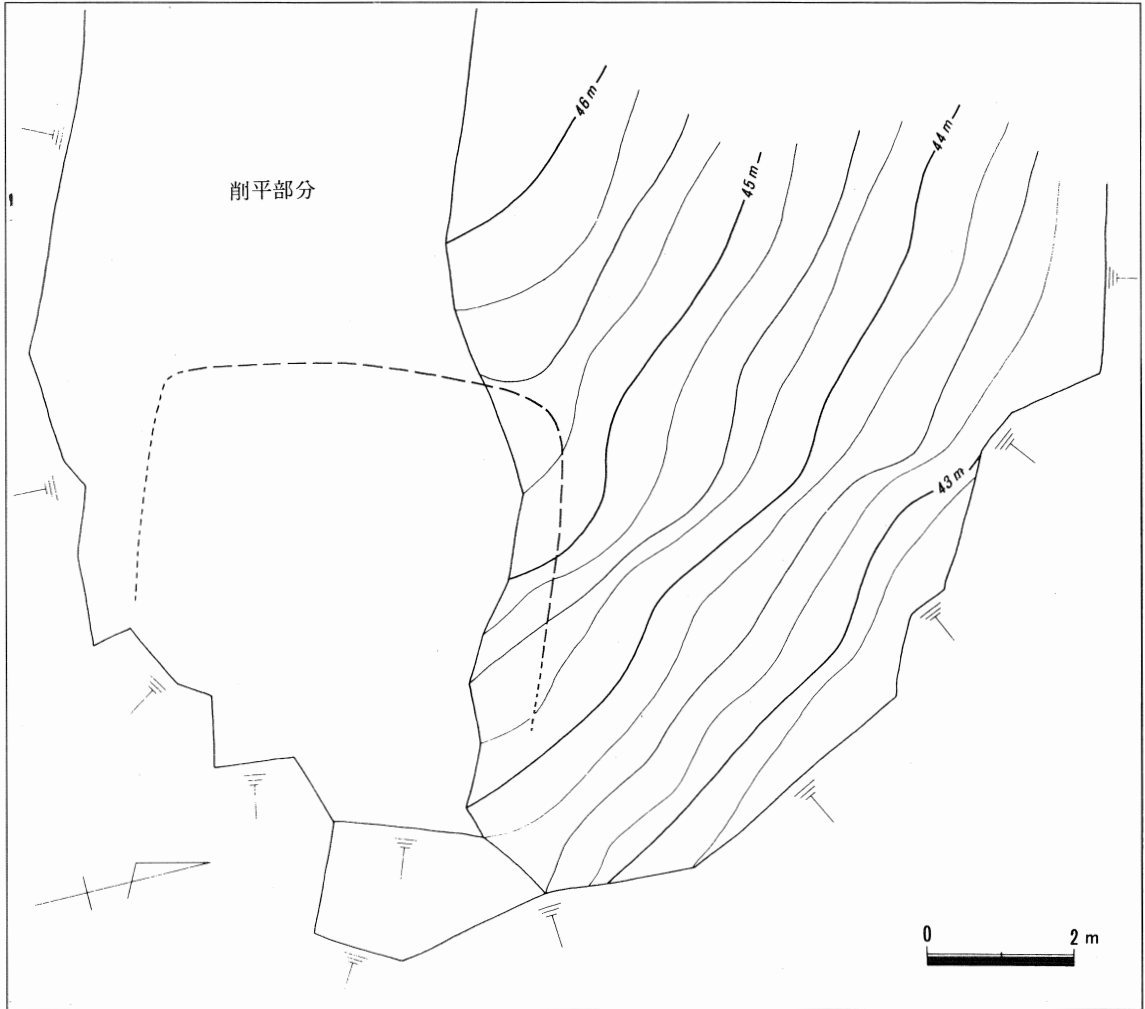


第18図 釣山2号墳墳丘出土遺物実測図(4)

4. 釣山34号墳

立地と外形 釣山34号墳は開発範囲内中央部の釣山頂上から東に延びる小尾根上に位置し、標高44～45.5m付近に構築されています。前述のとおり造成工事中に発見されたため、調査開始時にはすでに墳丘の一部は削平されていましたが、墳形および墳丘規模の確認と表土除去範囲の確認のためまず尾根に並行のトレンチを設定し掘り下げました。その結果、本墳はかなりの部分が流失あるいは削平によって喪失しているものの、主軸を尾根とほぼ平行のN-71°-Wにとる方墳であることがわかりました。

墳丘 墳丘の造成は、現在遺存している痕跡としては溝の掘り込みと地山の切削加工のみですが、おそらく盛土も行なわれていたものと思われます。墳丘の規模は、一部推定で南北約5.8m（北側墳裾から南側墳裾）、高さ0.3m（西側溝底～墳頂部）を測ります。なお墳丘の西側すなわち尾根の上方側のみに遺存している尾根を南北に横断する溝は、墳丘主軸ライン上で幅1.2mを測ります。

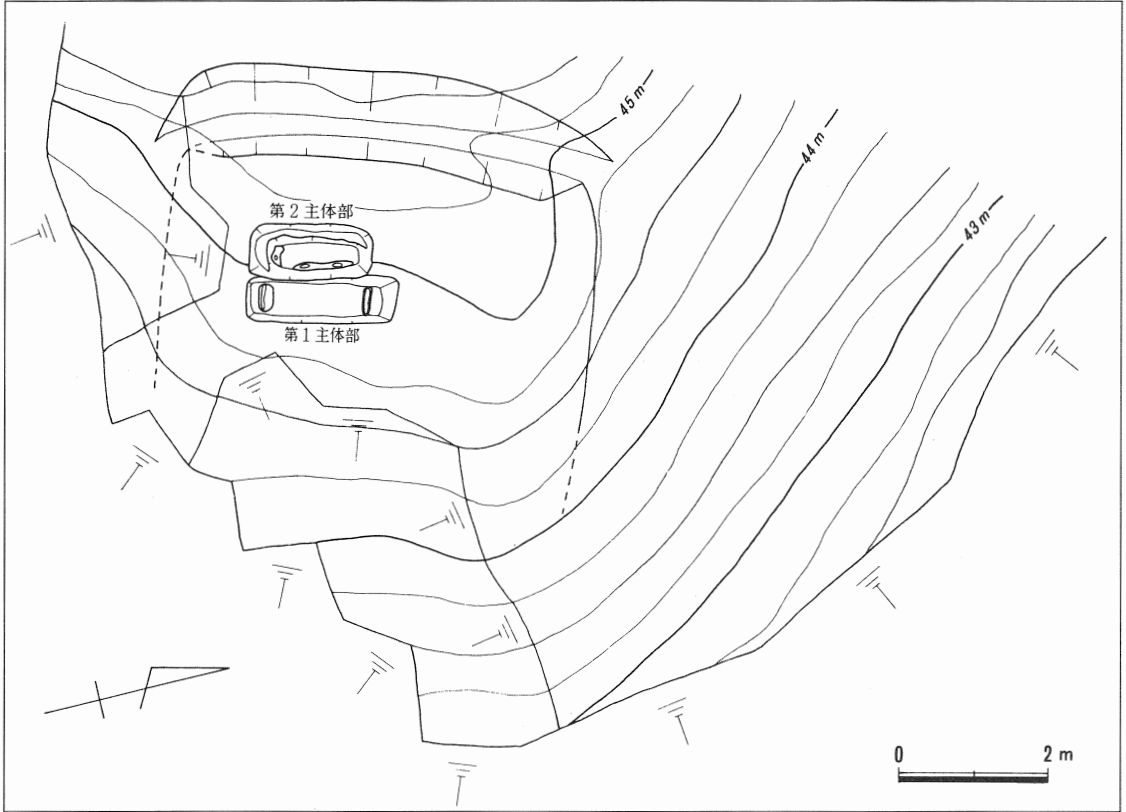


第19図 釣山34号墳地形実測図

埋葬施設 埋葬施設は、造成工事中に石棺材の一部がすでに露出していたため表土除去後にその周辺を中心に平面的に遺構の検出を行い、その結果墳頂部中央よりやや西側、すなわち尾根の上方側で木棺直葬と考えられる土壙墓1基（第1主体部）と箱形石棺1基（第2主体部）の計2基を検出しました。

各墓壙の平面形はいずれも隅丸方形を呈しており、主軸を南北方向にとって第2主体部が第1主体部墓壙の西壁の一部を切る形で平行に掘り込んでいます。

第1主体部の墓壙は、長さ2.0m、幅0.57m、深さ0.32mを測り、壁部は上方へ鋭角に立ち上がります。また、前述のとおり西側の壁部の一部が後に掘り込まれた第2主体部によってカットされています。墓壙内部には両小口部に小口穴が認められ、それらを挟む形で側板溝が掘り込まれています。なお北側小口部からは小口板の裏込め用と考えられる径約20cmの地山礫が検出されました。



第20図 釣山34号墳墳丘遺存図

本主体部の中からは遺物は検出されませんでした。

第2主体部の墓壇は、長さ1.61m、幅0.74m、深さ0.45mを測り、まず0.2m程度掘り下げたのち北側に石棺埋納部となる穴をさらに掘り込んで一部二段掘りとしています。壁部は上方へ鋭角に立ち上がります。

本主体部の石棺は板石を組み合わせる箱状の空間を造った箱形石棺で、北と南の両側に副室が設けられています。蓋石は、両副室の上をそれぞれ小さな板石でおおったのち石棺のほぼ全域をおおう1枚の大きな板石をのせ、すきまにややこぶりの板石をかぶせ仕上げに粘土で目バリを施しています。

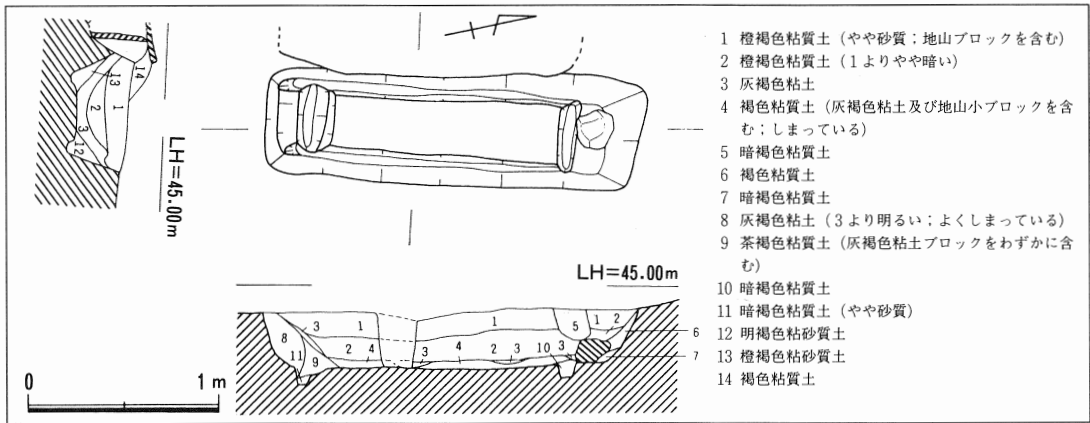
側板は、東側は1枚の板石を使用し、西側は1枚の板石を立てたのちその外側にややこぶりの板石1枚を重ねて立てています。さらに両側板の長さの足りない両副室部には小さな板石をそれぞれ継ぎ足して側板としています。

小口部は、南端部および南北両副室と遺体埋納室との間に側壁に挟まれる形でそれぞれ1枚の板石を立て、北端部では数個の地山礫を用いて副室としての空間を形成しています。

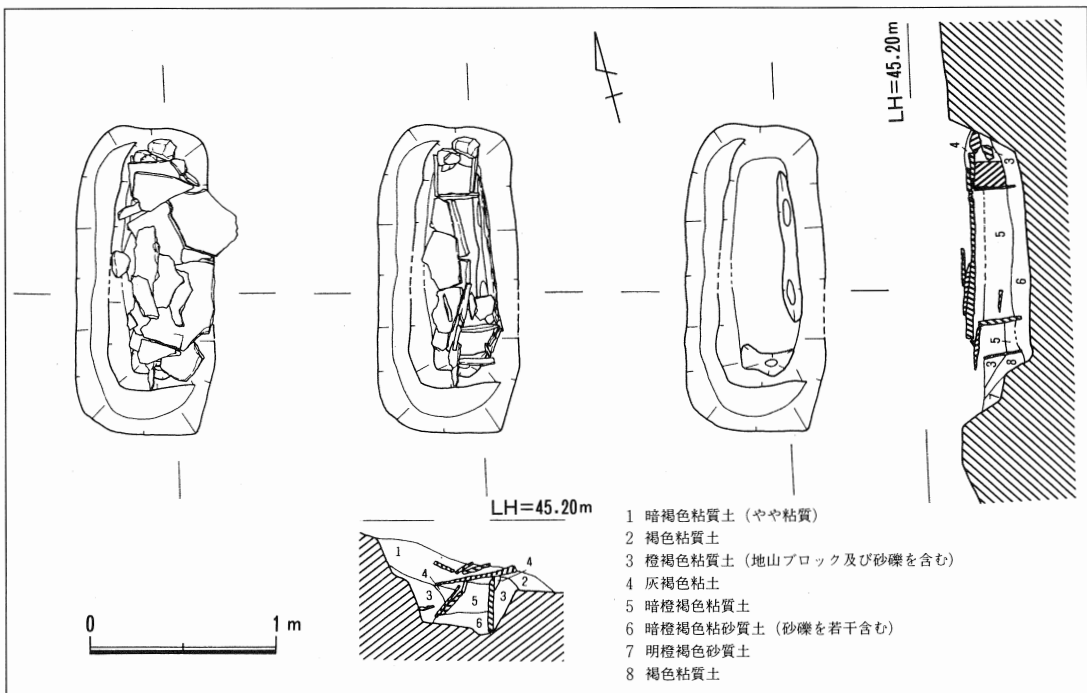
石棺内からは遺物は検出されませんでした。遺体埋納室の南端部から板石2枚をいわゆるV字形に組み合わせた石枕が検出されました。

なお石室の法量は、復元内法で南側副室、遺体埋納室、北側副室の順にそれぞれ長さ0.16m、0.67m、0.14m、幅約0.2m、0.23m、0.19m、高さ0.18m、0.2m、0.16mを測ります。

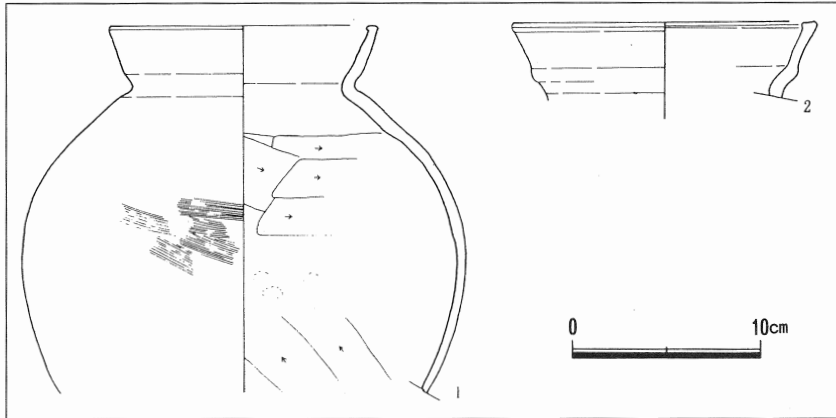
埋葬施設以外の遺物出土状況 本墳からは表土中から詳細不明の須恵器片1点と墳丘西側の溝底付近から土師器甕2個体が出土しています。



第21図 釣山34号墳第1主体部実測図



第22図 釣山34号墳第2主体部実測図



第23図 釣山34号墳出土遺物実測図

5. 釣山35号墳

立地と外形 35号墳は、2号墳と同じく開発範囲内最北部にある小尾根上に位置し、2号墳から若干下った標高60～63m付近に構築されています。他の古墳の調査と同様に、墳形および墳丘規模の確認と表土除去範囲の確認のためまず現地地形に留意しながら尾根と平行および直交する調査杭、トレンチを設定しました。その結果、本墳は盛土の流失によって形状の変化している部分はあるものの円墳であることがわかりました。

墳丘 墳丘は溝の掘り込みと地山の切削加工、盛土を行なって造成しています。溝は墳丘の西側(尾根の上方側)のみに西側にややふくらんだ円弧状に掘り込まれており、墳丘主軸ライン上で幅2.45m、深さ1.0mを測ります。

墳丘の南側および東側は崩落が顕著で、盛土もかなりの部分が流失していると考えられますが、墳丘中央部には比較的良く盛土が遺存しており、基底面からの高さは1.05mを測ります。

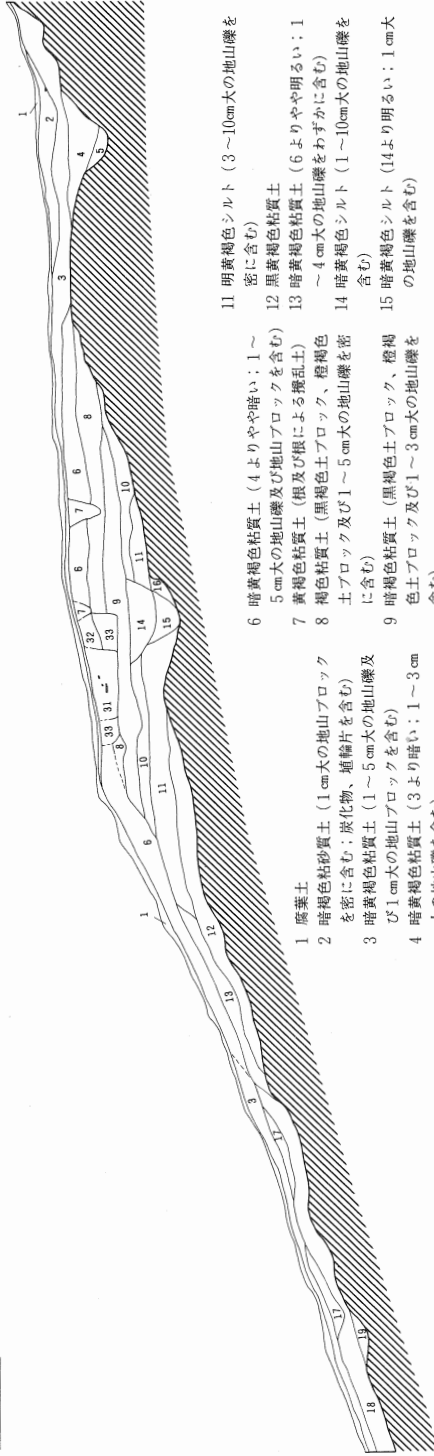
墳丘規模は東西径12.6m(東側墳裾から西側溝底)、南北径10.8m(北側墳裾から南側墳裾)、高さ2.98m(東側墳裾から墳頂部)、同1.87m(北側墳裾から墳頂部)を測ります。

埋葬施設等 本墳の埋葬施設掘り方の検出は墳頂面の精査の段階では困難だったため、段階的にトレンチを掘り下げるとともに拡張して重点的に断面を観察することで検出に努めましたが、明確な埋葬施設と考えられる遺構は検出できませんでした。但し、墳頂中央部よりやや東側で一部以外のほとんどの部分が流失した状態の浅い土坑状遺構を検出しました。しかしながら表土中から出土した須恵器と同一個体になる須恵器片が流入した状態で検出されたことやその位置、主軸の方位などと考え合わせると本墳に伴う遺構とは考えがたく、後世のなんらかの土坑と考えられます。

埋葬施設以外の遺物出土状況 本墳からは前述のとおり墳丘表土中から須恵器の器台、壺、甕の破片が出土しました。おそらく本墳にあったと想定される埋葬施設に供献されたものであろうと考えられますが詳細は不明です。また、墳頂部から詳細不明の鉄製品が出土しました。なお、本墳西側

A'

LH=63.40m A

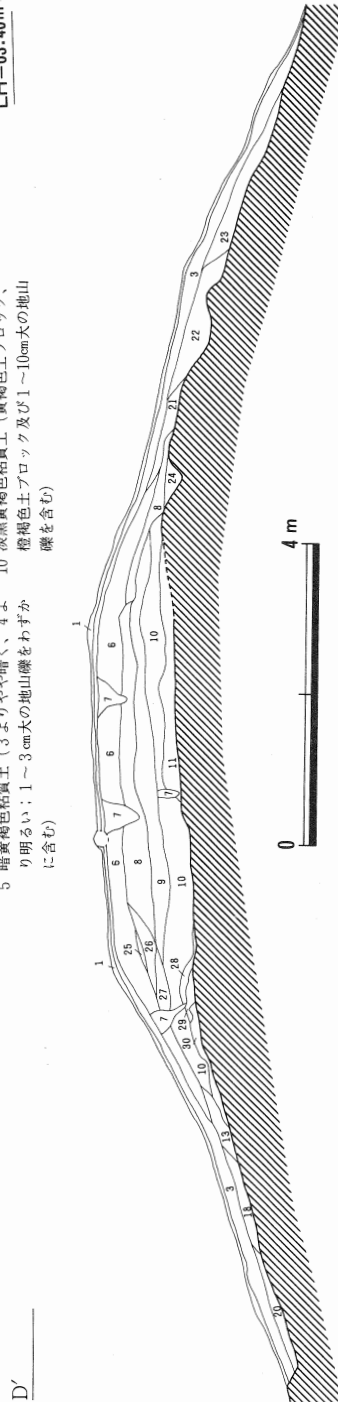


- 11 明黄褐色シルト (3~10cm大の地山礫を密に含む)
 12 黒黄褐色粘質土
 13 暗黄褐色粘質土 (6よりやや明るい; 1~4cm大の地山礫をわずかに含む)
 14 暗黄褐色シルト (1~10cm大の地山礫を含む)
 15 暗黄褐色シルト (14より明るい; 1cm大の地山礫を含む)

- 6 暗黄褐色粘質土 (4よりやや暗い; 1~5cm大の地山礫及び地山ブロックを含む)
 7 黄褐色粘質土 (根及び根による礫乱土)
 8 褐色粘質土 (黒褐色土ブロック、橙褐色土ブロック及び1~5cm大の地山礫を密に含む)
 9 暗褐色粘質土 (黒褐色土ブロック、橙褐色土ブロック及び1~3cm大の地山礫を含む)
 10 淡黒黄褐色粘質土 (黄褐色土ブロック、橙褐色土ブロック及び1~10cm大の地山礫を含む)

- 1 暗葉土
 2 暗褐色粘砂質土 (1cm大の地山ブロックを密に含む; 炭化物、植輪片を含む)
 3 暗黄褐色粘質土 (1~5cm大の地山礫及び1cm大の地山ブロックを含む)
 4 暗黄褐色粘質土 (3より暗い; 1~3cm大の地山礫を含む)
 5 暗黄褐色粘質土 (3よりやや暗く、4より明るい; 1~3cm大の地山礫をわずかに含む)

LH=63.40m D



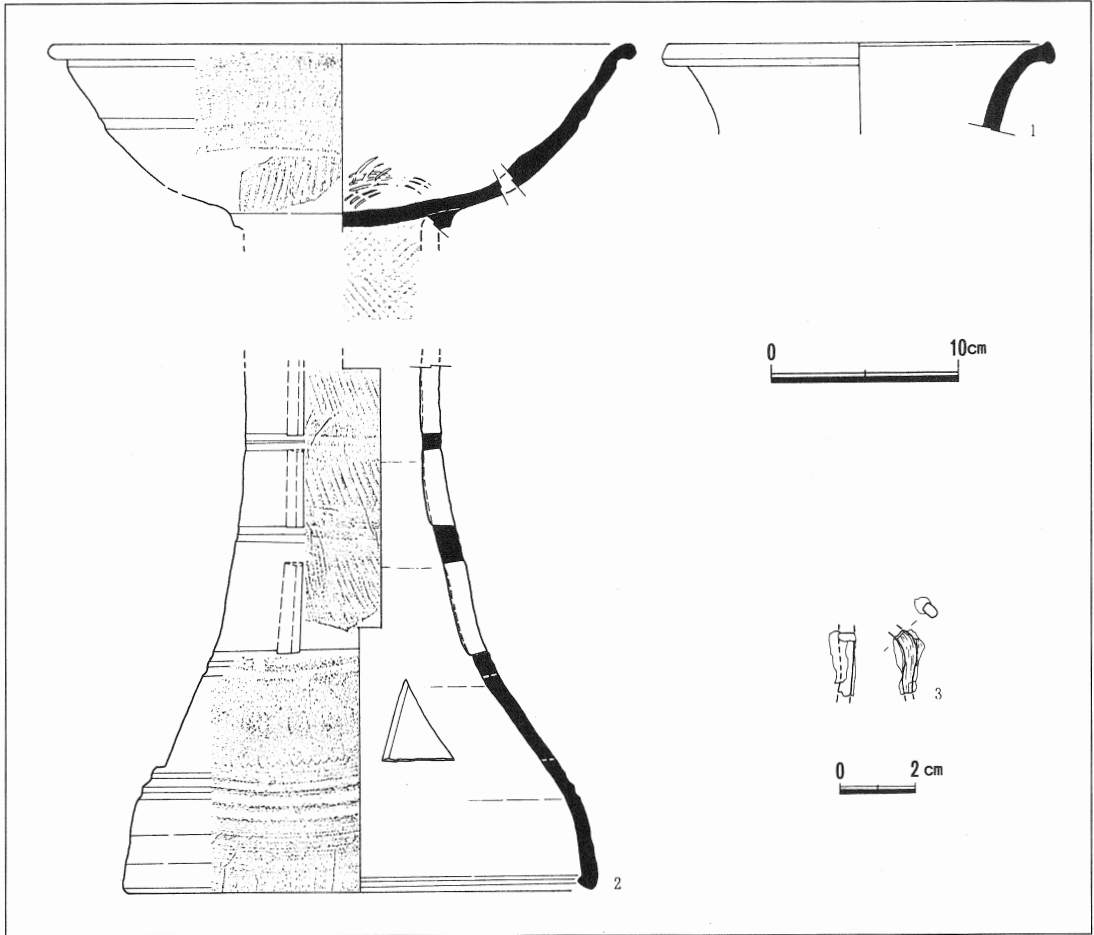
- 16 暗黄褐色シルト (15より明るい)
 17 淡橙褐色粘質土
 18 暗黄褐色粘質土 (13よりやや明るい)
 19 明黄褐色粘質土
 20 淡黒黄褐色粘質土 (地山ブロックをわずかに含む)
 21 暗黄褐色粘質土 (3よりやや明るい; 1~5cm大の地山礫を含む)

- 22 暗黄褐色粘質土 (3よりやや暗い; 3~7cm大の地山礫を多く含む)
 23 暗黄褐色粘質土 (21よりやや明るい; 3~10cm大の地山礫を含む)
 24 暗黄褐色粘質土 (3より暗い)
 25 暗褐色粘質土 (褐色土ブロックをわずかに含む)
 26 暗褐色粘質土 (黒褐色土ブロック、褐色土ブロックをわずかに含む)
 27 褐色粘質土 (8よりやや明るい; 地山ブロックを多く含む)
 28 暗黄褐色粘質土 (地山ブロックを密に含む)
 29 淡黒黄褐色粘質土 (10よりやや明るい; 地山ブロックを多く含む)

- 30 黄褐色粘質土 (地山ブロックをわずかに含む)
 31 暗黄褐色粘質土 (6より暗く、8より明るい; 須蓋器片を含む)
 32 暗黄褐色粘質土 (31よりやや暗く、8より明るい)
 33 暗黄褐色粘質土 (32よりやや暗く、8より明るい; 1~5cm大の地山礫を含む)

第24図 釣山35号墳丘断面実測図

の溝の中や本墳の西側から円筒埴輪片が出土していますが、これは本墳の西隣にある2号墳からの転落と考えられます。



第25図 釣山35号墳出土遺物実測図

6. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物を各古墳ごとにまとめると次のようになります。

- 2号墳 第1主体部 須恵器杯蓋2、杯身2、鉄鍬9、刀1、刀子1
第2主体部 須恵器杯蓋6、杯身5、有蓋高杯2、無蓋高杯1、有蓋台付き壺1
提瓶1、金環2、刀子2、管玉8、丸玉4
第3主体部 須恵器杯蓋3、杯身3、甕1、小玉1、土師器高杯1
墳丘・墳丘外 須恵器蓋1、横瓶1、壺1、円筒埴輪、形象埴輪（人物3・馬1）
鉄鍬2、不明鉄製品1、石鍬1
- 34号墳 土師器甕2、須恵器片1（表土中）
- 35号墳 須恵器器台1、甕体部片、壺体部片、不明鉄製品1

個々の遺物の説明は観察表にかえ、ここでは須恵器・埴輪について若干のまとめを記すこととします。

須恵器 今回の調査で特に2号墳では須恵器が各主体部に副葬され、蓋杯のセットが主な器種となりますが第2主体部ではさらに多くの器種が加わります。各々の蓋杯の形態的特徴から、第3、第1、第2の順に古い時期のものと考えられますが、調整技法からみると興味深いことがわかりました。まず、第3主体部の蓋杯は外面調整に外周部ヘラ削りがみられ、第1主体部では全面ヘラ削り、第2主体部ではヘラ切りのちナデがみられます。また蓋杯の内面中央部には同心円文当て工具痕が仕上げナデによって一部消されている例が多くみられました。さらに高温の焼成のため杯蓋の口縁部が受部に貼り付いて欠損している例がみられ、蓋杯のセットで焼成したことがわかりました。

埴輪 2号墳から多量の埴輪が出土していますが、その多くを円筒埴輪が占めます。そのうち現位置を保っていたものは15点ですがいずれも基部のみの遺存でした。これらを除き55×35×22cmの容量のコンテナ21箱分が整理中で、ここでは口縁部と基部の特徴的なものを図化しました。また、墳丘くびれ部南斜面出土の円筒埴輪（第16図6）を合わせると2号墳の墳丘をめぐる円筒埴輪の全体像が復元できます。高さ58cm、口径27～32cm、底径19～21cmを測り、基部を含めて5段からなります。基部から口縁部にかけての外反度はあまり大きくなく、凸帯の突出も低く断面三角形になるようなものもみられ上下のヨコナデも粗雑です。外面縦ハケ目、内面斜位のハケ目、基部は底部を中心として指ナデ、指頭圧痕が残ります。円形の透かし孔は埴輪の大きさに比べ小さく、中央段に一对が穿孔される程度です。また、基本的には基部を除き外面を赤彩します。鳥取県東部において、特に6世紀代の埴輪資料が少ないこともあってこの時期の様相は必ずしも明らかとは言えませんが、基部に再調整がみられず黒斑を有する点で因幡地方の円筒埴輪の特徴と共通します。また5世紀末～6世紀代の5段の円筒埴輪については県内でも事例がなく、4段としては三浦1号墳、大熊段2号墳、船岡町丸山遺跡、中山町岡1号墳などの例があるにすぎません。多くは基部から口縁部にかけての外反度の大きな3段の円筒埴輪であり、因幡地方で従来埴輪の衰退期と言われていたこの時期に5段の円筒埴輪が存在していたことは、今後の埴輪

研究に新たな一石を投じることとなりました。

形象埴輪については、写真図版33・34に示すように馬、人物、その他不明形象埴輪片が確認されました。馬形は頭部残存長31cm、頭部幅15cm、足部の股下長29cmを測ります。頭部、4本足、鞍の一部、鐙部分ほか体部片があります。人物埴輪は腕部分から3体が確認されました。体部(g)は残存長24cm、何かを背負っていたのか背中中央に剝離痕がみられました。(h)は両手を降ろし、肩や甲の部分に線刻文様がみられ武人と思われます。(l~m)はともに人物もしくは動物埴輪の一部と考えられます。長径が(l)7.5cm、(m)6.5cmです。なお、人物埴輪については赤彩が一部に認められましたが、(n右下)は緑色の顔料が残存していました。

いずれにしても調査前においては予想しえなかった古墳から発掘調査によって多量の埴輪が出土したことにより今後の古墳調査によっては新たな資料発見の可能性が十分考えられ、また埴輪の薄弱な地帯であった因幡地方にとってこれらは貴重な資料となるとともに、今後の整理によってはさらに興味深い事実が加わるものと思われます。

※ 今回、須恵器の年代観、鉄鏝の分類および部位名称については次の文献に従った。

田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981

杉山秀宏「古墳時代の鉄鏝について」『橿原考古学研究所論集第8』1988

観 察 表

釣山2号墳(土器)第7・10図

挿入番号	出土地	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④備考	遺物番号
			①口径 ②器高 ③底径 ④最大口径				
7図1	第1主体部南側	須恵器杯蓋	①13.7 ②4.8	口縁部は端部で短く内傾し内面におおむね凹みがめぐる。鈍い稜によって天井部とをわける。天井部は丸い。	口縁部内外面ヨコナデ。天井部逆時計回りのヘラ削り、頂部に粘土塊を残す。天井部内面仕上げナデ。	①2~3mmの砂粒を含む。②良好③淡灰色④完形。全体に薄く灰釉かかる。内面に朱付着。	346
7図2		須恵器杯蓋	①13.7 ②5.0	口縁部は端部で短く内傾し内面に沈線状の凹みがめぐる。天井部との境に稜がみられるが周回しない。天井部は丸い。	口縁部内外面ヨコナデ。天井部逆時計回りのヘラ削り、頂部に窯壁?を残す。	①2~3mmの砂粒を含む。4~5mm大の砂礫あり。②良好③灰色、淡灰色④口縁部1/5欠損。灰釉かかる。	337
7図3		須恵器杯身	①13.2 ②4.3	たちあがりは内傾しながら反り上がり、受部は体部から若干外方へ伸びる。体部は一部扁平な面をもつ。器壁が比較的薄い。	口縁部内外面ヨコナデ。底部1/3下半逆時計回りのヘラ削り。底部内面仕上げナデ。	①2~3mmの砂粒を含む。②良好③淡灰色④受部に杯蓋口縁端部1/4が貼り付く。外面緑釉かかる。	335
7図4		須恵器杯身	①12.6 ②4.6	たちあがりは内傾しながらわずかに反り上がり、受部は体部から短く上方へ伸びる。体部は丸く、鈍い稜がめぐる。	口縁部内外面ヨコナデ。底部下半逆時計回りのヘラ削り。底部内面仕上げナデ。	①2~3mmの砂粒を含む。②良好③淡灰色④受部約1/5欠損。緑釉かかる。	336
10図1	第2主体部北側	須恵器杯蓋	①13.6 ②4.5	口縁部は内彎し、端部で短く内傾する。天井部丸く口縁部との境は不明瞭である。	口縁部内外面ヨコナデ、のち外面口縁部に沿った工具によるナデ。天井部逆時計回りのヘラ削り、のち一部不定方向のナデ。天井部内面仕上げナデ。	①2mm前後の砂粒を含む。6mm大の砂礫あり。②良好③青灰色④完形。10-2とセットで出土。	368
10図2		須恵器杯身	①12.3 ②3.8	たちあがりは内傾し、受部は体部から上方へ短く立ち上がる。体部は扁平で底部に平坦面をもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。体部下逆時計回りのヘラ削り。底部内面仕上げナデ、一部に同心円工具痕。	①4~6mmの砂礫を多く含む。7mm大の砂礫あり。②良好③淡青灰色④完形。10-1とセットで出土。底部外面にヘラ記号あり。	368

釣山2号墳(土器)第10図

挿入番号	出土地	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④備考	遺物番号
			①口径 ②器高 ③底径 ④最大副径				
10図 3	第2 主体部 北側	須恵器 杯蓋	①13.35 ② 3.8	口縁部は内彎し端部内面に沈線状の凹みがめぐる。鈍い稜により天井部とをわけける。	口縁部内外面ヨコナデ。天井部外面逆時計回りの丁寧なヘラ削り。天井部内面仕上げナデ。	①3～4mmの砂粒を多く含む。8～9mm大の砂礫あり②良好③外面暗灰色、褐色、内面淡青灰色④完形。外面に薄く灰釉かかる。10-4とセットで出土。	366 369 375
		須恵器 杯身	①11.8 ② 4.1	内傾するたちあがりは中位からさらに屈曲して立ち上がり、受部は体部から短く上方へ突出する。体部は扁球形。	口縁部内外面ヨコナデ、のち底部内面仕上げナデ。一部に同心円工具痕。体部外面約1/2下半逆時計回りの雑なヘラ削り。	①2～3mmの砂粒を多く含む。1cm大の砂礫あり。②良好③淡青灰色④完形。10-3とセットで出土。	366
10図 5		須恵器 杯蓋	①13.6 ～13.8 ② 4.2	口縁部は内彎し端部でわずかに内傾する。天井部は扁平である。	口縁部内外面ヨコナデ。のち天井部内面仕上げナデ、一部に同心円工具痕。天井部外面ヘラ切りのちナデ。	①1～2mmの砂粒を含む。②良。焼きむらあり。③淡灰色、一部青灰色④完形。10-6とセットで出土。	370
10図 6		須恵器 杯身	①11.8 ② 3.9	内傾するたちあがりは端部でさらに屈曲して上方へ立ち上がる。受部は体部から上方へ短く突出する。体部は球形で底部は平坦な面をもつ。	口縁部内外面ヨコナデ、のち底部内面仕上げナデ。体部約2/3下半逆時計回りのヘラ削り。	①3～4mmの砂粒を多く含む。6mm～1cm大の砂礫あり。②良好③青灰色④完形。10-5とセットで出土。	370
10図 7		須恵器 杯蓋	①14.21 ③ 4.9	口縁部は内彎し、天井部との境は不明瞭である。	口縁部内外面ヨコナデ。天井部ヘラ切りのちナデ、粘土塊が所々付着する。	①1～2mmの砂粒を含む。②不良③乳灰色④完形。10-8とセットで出土。	367
10図 8		須恵器 杯身	①11.6 ～12.0 ② 4.5	細長いたちあがりは根元から彎曲しながら立ち上がり、受部は体部から若干屈曲して外方へ伸びる。底部は平坦面をもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。のち底部内面ナデ、一部同心円工具痕が明瞭に残る。底部ヘラ切りのち中央部ナデ。	①1～2mmの砂粒を多く含む。②良③淡灰色、外面一部淡青灰色④完形。10-7とセットで出土。	367
10図 9		須恵器 杯蓋	①13.2 ② 3.5	口縁部は内彎し端部は先細りとなっておえる。口縁部内面端部に沈線状の凹みがめぐる。天井部との境に鈍い稜がめぐる。	口縁部内外面ヨコナデ。のち天井部内面仕上げナデ。天井部外面逆時計回りのヘラ削り。	①3～4mmの砂粒を多く含む。5～7mm大の砂礫多い②良好③外面淡青灰色、内面青灰色④完形。10-10とセットで出土。	371
10図 10		須恵器 有蓋 高杯	①11.4	たちあがりは内彎しながら立ち上がり、受部は体部から若干外方へ屈曲して伸びる。体部は扁平で低脚である。	口縁部内外面ヨコナデ、のち杯部内面仕上げナデ、一部同心円工具痕。杯部外面逆時計回りのヘラ削り、のち脚部接合時のヨコナデ。脚部内外面ヨコナデ。	①2～3mmの砂粒を含む。4mm大の砂礫あり。②良好。焼き歪みあり。③灰色④脚部2/3欠損。緑色自然釉かかる。10-9とセットで出土。	371
10図 11		須恵器 有蓋 高杯	①11.2 ～12.2 ② 8.0 ③ 8.9 ～10.0	たちあがりはわずかに内傾しながらも上方へ伸びる。受部は体部から屈曲して外方へ短く突出する。短い脚部は脚端部が肥厚する。	口縁部内外面ヨコナデ、のち杯部内面一部ナデ、同心円工具痕?。杯部外面および脚部内外面ヨコナデ。	①2～3mmの砂粒を含む。②良好。焼き歪みあり。③杯部淡灰色、脚部灰色④完形。自然釉かかる。	372
10図 12		須恵器 高杯	①11.8 ②14.65 ③ 9.8	杯部は、扁平な底部から屈曲して外方へ立ち上がり口縁部端部は先細りとなっておえる。脚部は長くラップ状に広がり、脚端部はまるくおえる。脚部に円孔1を外面から穿つ。杯部外面屈曲部周辺および脚部外面中央部にカキ目工具による刺突文が周回する。	杯部内外面ヨコナデのちカキ目。脚部1/3上部ナデ以下内外面ヨコナデ、のち外面カキ目。	①1mm前後の砂粒を含む。②やや不良③淡灰色、一部乳灰色④ほぼ完形。	373
10図 13		須恵器 提瓶	① 9.8 ～10.0 ②24.95 ③16.7 22.3	口縁部は外反し端部で肥厚してまるくおえる。体部は球形で側面では充填部面が大きくふくれる。肩部両側にカギ状に短く屈曲した把手がつく。	口縁部内外面ヨコナデ。体部ヨコナデ、のち円盤充填部ナデ、対面はヘラ切りのち外周部逆時計回りのヘラ削り。のち両面中央部を残し粗なカキ目。のち口縁部接合、接合部ヨコナデ。	①2～3mmの砂粒を多く含む。②やや不良、焼きむらあり。③口縁部淡灰色、体部乳灰色。④口縁部一部欠損。容量約3.4ℓ	374

鈎山 2 号墳(土器)第11・12・14図

挿入番号	出土地	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④備考	遺物番号
			①口径 ②器高 ③底径 ④最大胴径				
11図 30	第2 主体部 南側 中層	須恵器 杯蓋	①13.2 ② 3.7	口縁部は内彎し端部はまるくおえる。天井部との境にわずかに突出した稜がめぐる。天井部は平坦面をもつ。	口縁部内外面ヨコナデ、のち天井部内面仕上げナデ。天井部逆時計回りのヘラ削り。	①3～4mmの砂粒を多く含む。②良好、内面に気泡多くみられる。③青灰色④完形。天井部外面にヘラ記号。11-31とセットで出土。	365
11図 31		須恵器 杯身	①11.4 ② 3.5	たちあがりは直線的に内傾し端部で先細となっておえる。受部は体部から上方へ短く突出する。	口縁部内外面ヨコナデ、のち杯部内面仕上げナデ。体部約2/3下半逆時計回りのヘラ削り。	①3～4mmの砂粒を多く含む。②良好③青灰色④完形。11-30とセットで出土。	365
11図 32		須恵器 蓋	①10.8 ② 3.8	口縁部は内彎し端部で内傾する段をもつが周回しない。天井部との境は不明瞭。	口縁部内外面ヨコナデ。天井部外面ヘラ切りのちナデ、のち外周部逆時計回りのヘラ削り。	①2～3mmの砂粒を含む。②良③青灰色④完形。11-33とセット。	364
11図 33		須恵器 脚付 短頸壺	① 7.4 ②14.4 ③ 9.8 ～10.4	口縁部はわずかに内傾して短く立ち上がる。肩は大きく張ってすばまり平坦な底部へつづく。脚部はハの字状に開き端部で段をとって屈曲する。	口縁部内外面ヨコナデ、体部内面ヨコナデ、外面ヨコナデのち底部ヘラ削り、のち肩部および底部カキ目。脚部内外面ヨコナデ。	①2～3mmの砂粒を含む。②良、脚部焼き重む。③青灰色④完形。11-32とセット。	364
12図 34	第2 主体部 直上表 土下	須恵器 甕	①28.4	口縁部は外反し上位でさらに開き、端部で内側に肥厚して端面をなす。体部はなだらかに底部へつづく。口縁部外面に波状文。	口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面指ナデのち弱いヨコナデ、内面指ナデ。体部外面叩き目、内面同心円工具痕、のち肩部粗な横ハケ目、一部ナデ。	①1～3mmの砂粒、5mm大の砂礫含む。②良好、焼き重む。③灰色、肩部内面暗灰色④口縁部2/3残存、頸部ほぼ完存、体部約1/6残存。	109 119 120 150 154
14図 1	第3 主体部 南側	須恵器 杯蓋	①14.4 ～14.6 ② 4.2	口縁部は内彎し端部で外方に屈曲して内面に段をもつ。天井部とを鈍い稜によってわけける。	口縁部内外面ヨコナデ。天井部内面仕上げナデ、天井部外面ヘラ切りのちナデ、外周部逆時計回りのヘラ削り。	①2～3mmの砂粒を多く含む。②良好③青灰色④完形。14-2とセットで出土。	380
14図 2		須恵器 杯身	①12.8 ② 4.25	たちあがりはわずかに弓なりに内傾し、受部は体部から若干屈曲して外方へ突出する。底部は平坦面をもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。のち底部内面仕上げナデ、一部同心円工具痕。底部ヘラ切りのちナデ。外周部逆時計回りのヘラ削り。	①2～3mmの砂粒を多く含む。②良好③青灰色④完形。14-1とセットで出土。	380
14図 3		須恵器 杯蓋	①14.4 ② 3.8	口縁部は外方へ開き端部で内傾する段をもつ。天井部とを鈍い稜によってわけける。	口縁部内外面ヨコナデ。のち底部内面仕上げナデ、一部同心円工具痕。天井部2/3上半逆時計回りのヘラ削り。	①1～2mmの砂粒を多く含む。②良好、焼き重みあり③青灰色、外面一部暗青灰色。④口縁部1/5欠損。14-4とセットで出土。自然釉かかる。	381
14図 4		須恵器 杯身	①12.65 ② 4.6	たちあがりはわずかに内傾しながらも直線的に立ち上がる。受部は体部から若干屈曲して外方へ伸びる。	口縁部ヨコナデ。底部2/3下半逆時計回りのヘラ削り。	①1～2mmの砂粒を多く含む。②良好③淡青灰色、外面一部暗灰色。④完形。受部に口縁部1/8貼り付き残存。14-3とセットで出土。	381
14図 5		須恵器 杯蓋	①14.2 ② 4.5	口縁部は直立して端部は内傾して段をもつ。天井部とは口縁部の屈曲によってわかれる。	口縁部内外面ヨコナデ。天井部内面弱い仕上げナデ、一部明瞭な同心円工具痕。天井部外面逆時計回りのヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む。②良好③淡青灰色④ほぼ完形。14-6とセットの可能性。	382
14図 6		須恵器 杯身	①12.0 ～12.3 ② 4.25	たちあがりは内傾し、受部は体部から屈曲して外方へ伸びる。底部はまるい。	口縁部内外面ヨコナデ。底部内面指頭圧痕、ナデ、一部明瞭な同心円工具痕。底部外面2/3下半逆時計回りのヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む。②良好③淡青灰色④完形。若干重む。14-5とセットの可能性。	383
14図 8	第3 主体部 南側 上層	須恵器 甕	①12.8 ②14.4	外反する頸部から口縁部で屈曲、鈍い稜をとり外方へ伸びる。口縁端部は内傾する段をもつ。肩は張りが甘く体部1/3やや下方に最大胴径をもつ。底部はまるい最大胴径上部に凹線、最大胴径部に円孔1を外面から穿つ。	口縁部内外面ヨコナデ。体部最大胴径部以下逆時計回りのヘラ削り。	①3～5mmの砂礫を多く含む。②良好③淡青灰色、淡灰色。④口縁部1/2欠損。	378
14図 9		土師器 高杯	①11.3	楕形の杯部に外反する脚部がつく。口縁部はかすかに内彎してそのまま丸くおえる。	杯部および脚部内外面ナデ。脚付け根部に面取りの痕確認。	①2～3mmの砂粒を多く含む。②良③淡褐色。④杯部1/2、脚部の一部が残存。杯部内外面および脚部外面赤彩。黒斑あり。	379

鈎山 2 号墳(埴輪・土器)第15・16・17図

挿入番号	出土地	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④備考	遺物番号
			①口径 ②器高 ③底径 ④最大胴径				
15図1	埴丘	円筒埴輪	①27.4	口縁部は外反し端部でわずかに内傾気味に短く立ち上がり平坦面をもつ。	口縁部斜位のハケ目、のち口縁端部ヨコナデ、端面工具によるヨコナデ。内面に成形時の指頭圧痕が残る。	①1~3mmの砂粒を含む。 ②良好③淡褐色 ④口縁部1/3残存。外面~口縁部内面の一部赤彩。	140
15図2		円筒埴輪	①27.4	口縁部は外反し端部でわずかに上外方につままれ屈曲をかける。口縁部上端にわずかに凹む面をもつ。	口縁部斜位のハケ目、のち口縁上部ヨコナデ。内面に指頭圧痕が残る。	①1~3mmの砂粒を含む。 ②良好③淡褐色 ④口縁部1/4残存。外面~口縁部内面の一部赤彩。	140
15図3		円筒埴輪	①28.4	口縁部は大きく外反し、端部でさらに外方につまみ出され丸くおえる。	口縁部外面縦ハケ目、のち口縁上部斜位のハケ目、内面横ハケ目。のち口縁部上部ヨコナデ。	①1mm以下の砂粒を含む。 ②良好③淡褐色 ④口縁部1/4残存。外面~口縁部内面の一部赤彩。	17
15図4		円筒埴輪	①28.7	口縁部は外反度が弱く、端部はそのまま尖り気味におわる。凸帯は断面台形。	口縁部外面斜位のハケ目、内面横ハケ目。のち口縁部上部ヨコナデ凸帯部ヨコナデ。	①1~3mmの砂粒を含む。 ②良好③淡褐色 口縁部外面に赤彩。口縁部1/4残存。	185 199
15図5		円筒埴輪		断面台形の凸帯で頂部が若干凹む。	凸帯部ヨコナデ、外面に一部縦ハケ目が認められる。内面上方向の強いナデ。	①1~3mmの砂粒を含む。 ②良好③淡褐色④約1/12残存。	279
16図6	埴丘くびれ部南斜面	円筒埴輪	①32.0~32.5 ②58.2 ③20.6 ④21.0	基部から徐々に外方へ開き、外面に凸帯が4本めぐる円筒埴輪。基部が長く上の各段は長さがほぼ均衡する。口縁部は端部が外方につまみ出されわずかに外反する。凸帯は断面がくずれた台形状で突出度も低い。中央段に不整円孔2が相対する。	外面縦ハケ目、上部は若干斜位となる。凸帯貼り付けのち雑なヨコナデ、口縁部ヨコナデ。基部ナデ、指頭圧痕。内面横~斜位のハケ目。基部指ナデ、指頭圧痕。底面に3ヶ所の溝状の工具痕。内面は粘土接合痕が明瞭である。	①3mm前後の砂粒を多く含む。 ②良 ③淡橙褐色④体部約1/4欠損。外面赤彩。黒斑あり。	234
16図7		円筒埴輪	③19.5~21.0	ほぼ直線的に立ち上がり器壁厚くどっしりした基部。	外面縦ハケ目。内面粗なハケ目下部指ナデ。底面に溝状の工具痕、粘土接合痕。	①1~3mmの砂粒を含む。5mm大の砂礫あり。②やや不良③褐色④底部完存。黒斑あり。位置図(4図-2)あり	321
16図8		円筒埴輪	③18.9	ほぼ直線的に立ち上がり底端部で内傾して内側に肥厚する基部。凸帯は断面台形で突出度が低い。	外面縦ハケ目、凸帯貼り付けのちヨコナデ。内面強い指ナデ、ナデ。底端部指頭圧痕。底面に浅い溝状の工具痕あり。	①1~3mmの砂粒を含む。4mm大の砂礫あり。②不良③淡黄褐色④基部約1/2残存。外面凸帯部赤彩。黒斑あり。位置図(4図-6)あり。	325
16図9	円筒埴輪	③19.3~20.0	底部から直線的に立ち上がり中位で彎曲して凸帯部へつづく。凸帯断面は台形で突出度は低い。器厚にむらみられる。	外面縦ハケ目、凸帯貼り付けのちヨコナデ。底部ナデ。内面横~斜位のハケ目。底部雑なナデ指頭圧痕。	①1~3mmの砂粒を含む。②やや不良③淡橙褐色 ④基部完存。外面一部に赤彩。黒斑あり。位置図(4図-13)あり。	332	
17図1	埴丘	須恵器杯蓋	①13.75 ②4.8	口縁部は外方へわずかに張り出し端部はふくらみをもって丸くおえる。天井部との境は不明瞭である。	口縁部内外面ヨコナデ。天井部内面指頭圧痕あり。天井部外面ヘラ切りのちナデのち外周部逆時計回りのヘラ削り。	①2~3mmの砂粒を含む。6mm大の砂礫あり。 ②良③暗青灰色、暗灰色 ④完形。	37
17図2		須恵器壺	①14.1 ③18.4	頸部から大きく外反し、中位で屈曲して口縁部で鈍い稜がめぐり端部はわずかに肥厚して平坦面をもつ。肩部はなだらかで最大胴径部に若干張りみられるが全体的に体部は球形である。	口縁部外面ヨコナデ。体部最大胴径部以下叩き目のちナデ、のち体部2種のカキ目。口縁部内面ヨコナデ、のち斜位のナデ。底部同心円工具痕、ナデ、他指頭圧痕が残る。	①1~2mmの砂粒を含む。②良好 ③暗灰色、一部灰色。 ④口縁部1/10残存。肩部完存胴部1/2残存。	28 41 60 70 90 93
17図3	埴頂部	須恵器横瓶	①8.8 ②19.2 ④17.4~25.6	頸部から大きく外反し、口縁部は屈曲して外方へ立ち上がり端面をもつ。体部はなだらかな後形である。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面丁寧な叩き目のち粗なカキ目。内面当て工具痕を丁寧にナデ消す。円盤充埴部周辺部口縁部接合部ナデ。	①2mm前後の砂粒を含む。 ②良好③淡灰色 ④口縁部1/8残存。体部所々欠損。暗緑色自然釉かかる。	79 88 90 93 97

釣山 2 号墳(鉄鏃)第 9・10 図

()残存値 < >推定値 単位(cm)

挿図番号	出土地	全長	鏃 身 部			筥 被		茎		頸部	備 考	遺物番号
			平面形 断面形	長さ×幅×厚さ	逆 刺 逆刺長	闊	長さ×幅×厚さ	長さ×幅×厚さ 断 面 形				
9 図 5	第 1 主体部 北側床面	(10.4)	三角形 片刃造	5.5×3.4×0.2	腸尖 1.65	台形	4.85×0.9×0.25	(1.7)×0.5×0.3 隅丸方形	短		334	
9 図 6		(11.0)	三角形 片切刃造	(3.9)×(2.65)×0.2	無 -	棘状	3.7×0.7×0.3	(3.4)×?×? 方 形	短	木質痕。	340	
9 図 7		12.6	三角形 片丸造	4.4×2.65×?	無 -	棘状	3.7×0.8×0.3	4.5×?×? 方 形	短	木質および 巻縮痕。錆 膨れ著しい	343	
9 図 8		15.9	三角形 片丸造	4.2×2.75×?	無 -	棘状	3.25×0.65×0.3	8.45×?×? 円 形	短	木質および 巻縮痕。錆 膨れ著しい	343	
9 図 9		(13.85)	長三角形 片切刃造	1.9×1.2×0.2	無 -	棘状	8.95×1.05×0.3	(3.0)×?×? 方 形	長	木質および 巻縮痕。	342	
9 図 10		(12.9)	長三角形 片切刃造	(2.0)×1.2×(0.15)	無 -	台形	9.15×0.9×0.3	1.75×?×? 隅丸方形	長	木質および 巻縮痕。	345	
9 図 11		16.65	三角形 ?	(1.1)×(1.25)×? ?	無 -	?	(8.95)×(0.9)×0.3	(6.6)×0.5×0.3 方 形	長	木質および 巻縮痕。	345	
9 図 12		(14.45)	三角形 ?	(1.35)×(1.55)×? ?	無 -	棘状	(9.1)×0.9×0.25	(4.0)×?×0.3 方 形	長	木質および 巻縮痕。	345	
9 図 13		(11.8)				台形 ?	(7.4)×0.9×0.2	(4.4)×?×? 方 形	長	木質および 巻縮痕。	341	
18 図 2		墳丘 SK-01 ?	(5.2)	柳葉形 平造	(3.8)×1.9×0.1	無 -		(1.4)×1.0×0.1				319
18 図 3			(8.6)					(8.6)×0.5×0.5		残存 1/3 にねじり。	319	
18 図 4			(4.0)						(4.0)×0.4×0.35		茎端部で曲 げ輪を組み 合わせる。	388

釣山 2 号墳(鉄刀・刀子)第 9 図

単位(cm)

挿図番号	出土地	種類	全長	身			茎		備 考	遺物番号
				身先(付近) 長さ	幅×厚さ	幅×厚さ	長さ×幅×厚さ			
9 図 14	第 1 主体部 東側床面	鉄刀	(22.8)	16.05	1.6×0.3	2.3×5.5	6.75×0.4×-	刃身間部は直角をなし茎部は間部から端部へと幅、厚さとも減じたのち、茎尻部で幅を丸くたたき出し厚みをさらに減じて尖り気味とする。全体に木質が残る。	338 347	
9 図 15		刀子	(14.5)	10.3	1.6×0.4	(1.7)×?	4.2×0.75×0.3		全体が鞘木質に覆われ、刀身元部の厚さや間部が不明瞭。茎部はほぼ同幅で茎尻にむけて厚みを減じる。茎尻には斜めの巻縮痕。	339
9 図 28	第 2 主体部 中央床面	刀子	12.4	7.4	0.75×0.15	1.4×0.4	5.0×0.9×0.4	茎部に柄木質が残る。	361 362	
9 図 29	第 2 主体部 南東側	刀子	(9.6)	6.0	0.85×0.2	1.1×0.3	3.6×0.9×?	鞘金具遺存により間部不明瞭。茎部は幅、厚さとも茎尻にむけて減じる。	363	

釣山 2 号墳(玉類)第10・14図

単位(mm)

挿図 番号	出土地	種類	長さ	径	孔 径		穿孔	色 調	重量 (g)	材 質	備 考	遺物 番号	
					最大	最小							
16	第2主体部 床 面	管 玉	26.4	10.0	2.8	1.3	片側	濃緑色	4.7	碧玉		350	
17		管 玉	26.2	8.5	3.0	1.0	片側	濃緑色	4.2	碧玉		351	
18		管 玉	30.0	9.5	3.9	0.8	片側	濃緑色	5.1	碧玉		352	
19		管 玉	20.5	10.5	3.0	1.0	片側	濃緑色	4.1	碧玉	外側に縦位の成形痕	353	
20		管 玉	22.0	8.0	3.5	1.0	片側	濃緑色	(2.2)	碧玉	外側に縦位の成形痕 一部欠損	354	
21		管 玉	21.5	8.2	3.2	1.2	片側	濃緑色	2.6	碧玉		357	
22		管 玉	21.0	8.5	3.5	1.3	片側	濃緑色	3.3	碧玉	外側に縦位の成形痕	356	
23		丸 玉	6.5	9.3	2.3	1.0	片側	半透明	0.9	水晶		355	
24		丸 玉	6.5	9.5	2.8	1.0	片側	半透明	0.9	水晶		358	
25		管 玉	10.8	6.8	1.5	-	-	濃青色	0.8	ガラス	気泡あり、縦位の筋あり	349	
26		丸 玉	5.5	7.5	1.8	-	-	濃青色	0.4	ガラス	気泡あり	348	
27		丸 玉	3.5	5.8	1.3	-	-	濃青色	0.2	ガラス	気泡あり、縦位の筋あり	359	
14図 7		第3主体部 床 面	小 玉	3.0	4.0	1.2	-	-	青色	0.1	ガラス		384

釣山 2 号墳(耳環)第10図

単位(mm)

挿図 番号	出土地	鍍金	長径	短径	断面径	断面形	突き合 わせ	重量 (g)	備 考	遺物 番号
14	第2主体部 床 面	金	24.5	24.0	(2.8×2.5)	楕円	離	(1.4)	銅胎。内側にそって金メッキ残存。	360
15		金	(23.5)		(2.8×2.4)	楕円	離	(1.0)	銅胎。内側にそって金メッキ残存	360

釣山 2 号墳(石鏃)第18図

単位(cm)

挿図 番号	出土地	全長	幅	厚さ	重量 (g)	備 考	遺物 番号
1	SK-01?	2.8	1.9	0.33	1.3	平基無莖鏃。刃部は両面加工。完存。	387

釣山34号墳(土器)第23図

挿入 番号	出 土 地	器 種	法量(cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④備考	遺物 番号
			①口径 ②器高 ③底径 ④最大胴径				
23図 1	周溝底	土師器 甕	①13.0	くの字状口縁で端部が内側に肥厚する。体部は球形である。	体部外面横～斜位のハケ目、肩部内面ナデ、のち口縁部内外面ヨコナデ。体部内面底部左上方向、肩部右方向のヘラ削り、のち最大胴径部ナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む。②良③淡褐色 ④外面体部下半に煤多く付着。口縁部1/2肩胴部1/4残存。	2
23図 2		土師器 甕	①15.8	退化した複合口縁。屈曲は鈍く外方に大きく開き、上端部は内側に肥厚する。	口縁部内外面ヨコナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む。②やや不良③淡橙褐色④黒斑あり。口縁部1/8残存	2

釣山35号墳(土器)第25図

挿入 番号	出 土 地	器 種	法量(cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④備考	遺物 番号
25図 1	墳頂部	須恵器 甕	①19.0	逆ハの字状に開く口縁部で、端部でさらに外反し、上下に肥厚して凸状の端面をもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。	①1mm前後の砂粒を含む。②良③灰色、断面セピア色 ④口縁部1/8残存。	4
25図 2		須恵器 器台	①30.0 ②23.5 ～24.2	楕状の受部で、口縁部端部で屈曲外反しわずかに肥厚してまるくおわら。筒状の脚部から徐々にハの字状に開き脚台部は内彎気味におさまる。脚端部は内側に肥厚する。受部中央部にと口縁部に凹線で区画された中に波状文。脚部は2条単位の凹線で段を区画し、脚柱部には各段にハケ工具による連続刺突文と長方形透かし孔、脚台部上段に三角形の透かし孔、波状文がめぐる。	受部底部叩き目、内面同心円工具痕、口縁部ヨコナデ。脚部ナデ、ヨコナデ、接合痕残る。脚台部ヨコナデ。長方形透かし孔は3方向直列3段以上、三角形透かし孔も3方向にはほぼ等間隔に外面から穿つ。	①1mm前後の砂粒を多く含む。 ②良好 ③淡灰色～灰色 ④口縁部1/8、受部中央1/4、脚柱上端部欠損、以下2/3残存。脚端部ほぼ完存。受部自然軸かかる。	1 2 4 7 8 9 11 13 33 34 35

Ⅳ おわりに

今回の発掘調査は、独立丘陵である釣山から東側へ延びる小尾根上に立地する釣山2号墳、34号墳、35号墳の3基の古墳が対象となりました。以下、いくつかのポイントに再度ふれることで今回の発掘調査のまとめとします。

立地 3基の調査古墳のうち、2号墳と35号墳は釣山古墳群を構成する主稜線上の古墳に続く支稜線上の標高60～70m付近に隣接して造営されているのにたいして34号墳は、他の古墳から1基だけ離れた支稜線上の標高45m付近に造営されています。調査古墳は第1図「釣山古墳群周辺主要遺跡分布図」および第2図「釣山古墳群分布図」にみるように東側眼下に広がる平野を一望のもとに見渡せる、あるいは平野から見上げられる絶好の位置に立地しているといえます。あえて3基の古墳を比較すると、2号墳が位置的には勝っているといえましょう。

本古墳群の周辺には弥生時代以降の遺跡が知られており、律令体制下では中央と近い豪族の存在も知られています。また、調査古墳の眼下には菖蒲廃寺が、釣山の裏側の平野部には北村恵儀谷遺跡が所在し、当地域の古代の豪族研究の上でも本古墳群は気にかかる遺跡といえましょう。

墳丘 墳丘は各古墳とも自然地形を若干整備するとともに地山整形を行って墳丘基底面を造り、尾根の高い方側に溝状の掘り込みを行い、盛土を施して成形しています。盛土は、3基の古墳ともかなり流出したものと考えられ、34号墳にいたっては本来あったと考えられる盛土が全く遺存していませんでしたが、それでも2号墳の後円部と35号墳には墳丘基底面からそれぞれ2m弱、1m強の高さが遺存していました。見る位置によっては築造時のそれぞれの墳丘はかなり高く感じられたものと思われます。ただ墳丘規模をみるかぎり、2号墳が全長26m強、34号墳が一辺約6m、35号墳が径約12mでいずれもそれぞれの形状の中では小規模の古墳といえます。

埋葬施設 埋葬施設は、2号墳から3基の木棺、34号墳から1基の木棺と1基の箱形石棺を検出しました。いずれも尾根に直交する墓壙をもつもので、34号墳の箱形石棺は遺体埋納室の両端に副室をもつ点が特徴的ですが、そのほかのものはその構造、種類、規模ともとりたてて特筆すべき要素を持たない一般的なものといえます。なお、2号墳検出の3基の埋葬施設については、第3主体が最も先行し、引き続いて第1主体、最後に第2主体が埋納されたものと考えられます。

築造時期 3基の古墳のうち、2号墳以外は出土遺物が少なく築造時期を推定する資料に乏しいといえますが、墳形や埋葬施設の形態等とも合わせて考えると34号墳が前期末から中期初頭、2号墳が後期中頃から後半、35号墳が後期後半頃のものと考えられます。

以上、きわめて主観的なまとめとなりましたが、本古墳群が本県東部の古墳を知るうえで貴重な資料を提供するとともに周辺の遺跡や文献等ともあわせて今後十分な検討が必要であることを記しておわりとします。

第2表 釣山古墳群調査古墳一覽表

名称	墳丘 形状・規模 (m)	主体部 No	埋葬方法	葬施模		設墓		等		遺物	備考
				棺規	模	平面形態	墓	墳	等		
釣山2号墳	前方後円墳 全長 26.4 前方部幅 13.7 後円部径 17.3 後円部高 4.3	1	木棺直葬	-	-	隅丸方形	長さ×幅×高さ(m)	3.56×1.64×0.78	蓋杯、鉄刀、 刀子、鉄鏃	円筒埴輪(計 15基の基部が 列状に遺存)	杯蓋1点の内面に朱(ベンガラ?)塗布
		2	木棺直葬	-	-	隅丸方形	3.24×1.68×0.67	蓋杯、高杯、 蓋付台付壺、 甕、刀子、耳 環、管玉、丸 玉、小玉	形象埴輪(馬、 人物)杯蓋、 壺、横瓶、石 鏃、鉄製品	第2主体部が第1主体部を切る 甕は供献用と考えられる	
		3	木棺直葬	-	-	隅丸方形	3.07×1.10×0.82	土師器高杯、 蓋杯、甕、ガ ラス小玉	-	高杯、甕は供献用の可能性大	
釣山34号墳	方墳 南北推定 5.8 溝底からの高さ 0.3	土坑	-	-	-	-	-	-	-	後世のもの可能性が高い	
		1	木棺直葬	-	-	隅丸方形	2.0×0.57×0.32	-	-	小口穴、側板溝あり	
		2	箱形石棺	南側副室 0.16×0.20×0.18 遺体埋納室 0.67×0.23×0.20 北側副室 0.14×0.19×0.16	-	隅丸方形	1.61×0.74×0.45	石枕	須恵器片 土師器甕	石棺には南北両端に副室あり 墓壇は一部二段掘り	
釣山35号墳	円墳 東西 12.6 南北 10.8 東側墳幅からの 高さ 2.98	-	-	-	-	-	-	-	器台、壺、甕 円筒埴輪(2 号墳からの転 落)	主体部検出できず 後世のもの可能性が高い	
		土坑	-	-	-	-	-	器台片(墳丘 出土の器台と 同一個体)	-	-	

圖

版





1. 調査地遠景(南東から)



2. 同(南から)

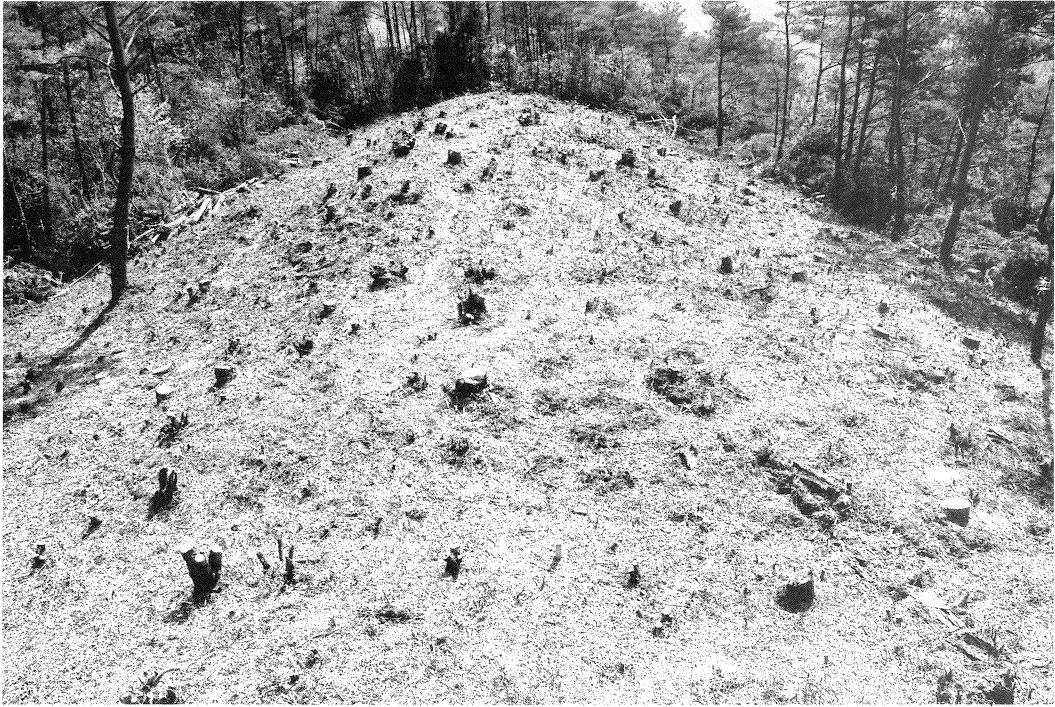
図版 2



1. 釣山 2・35号墳全景(北西から)



2. 同(南東から)



1. 釣山 2 号墳調査前(西から)



2. 同 表土除去後(西から)

図版 4



1. 釣山 2 号墳西側溝断面(北から)



2. 同 後円部断面(北西から)

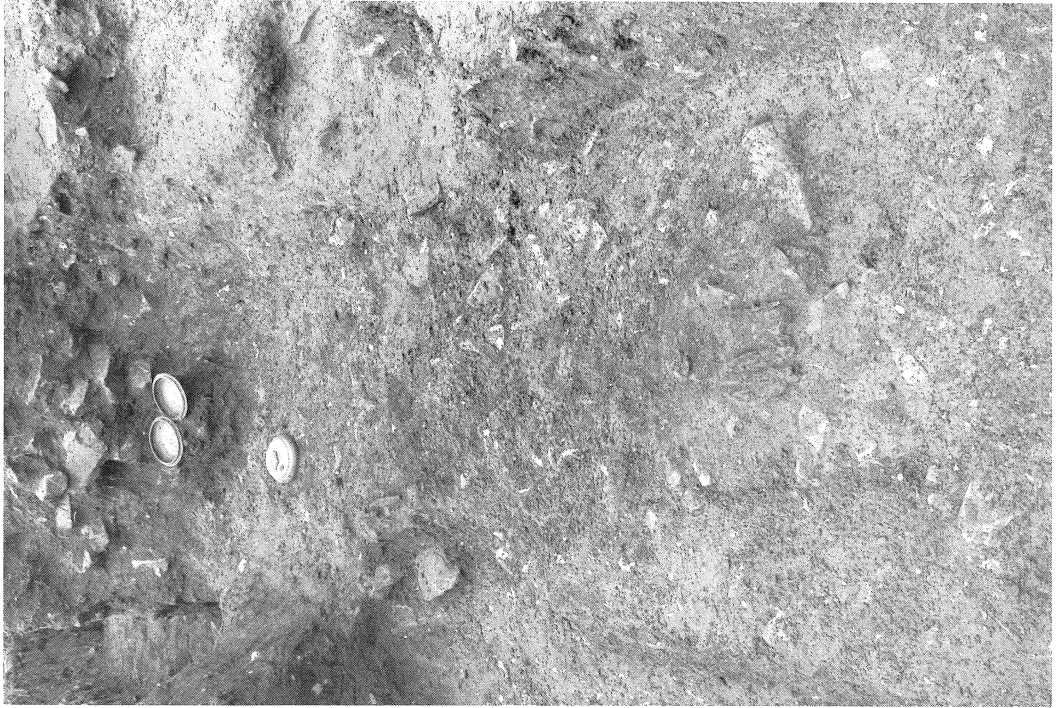


1. 釣山 2 号墳第 1 主体部断面(北から)



2. 同 完掘後(西から)

図版 6



1. 釣山 2 号墳第 1 主体部遺物出土状況(北から)



2. 同(北から)



1. 釣山 2 号墳第 1 主体部遺物出土状況(東から)



2. 同(東から)

図版 8



1. 釣山 2 号墳第 2 主体部直上遺物検出状況(西から)



2. 釣山 2 号墳第 2 主体部検出状況(南から)



1. 釣山 2 号墳第 2 主体部断面(北から)



2. 同 完掘後(西から)

図版10



1. 釣山2号墳第2主体部遺物出土状況(西から)



2. 同(南から)



1. 釣山2号墳第2主体部遺物出土状況(南から)



2. 同(南から)

図版12



1. 釣山2号墳第2主体部遺物出土状況(北から)



2. 同(西から)



1. 釣山2号墳第2主体部遺物出土状況(南から)



2. 釣山2号墳第3主体部完掘後(東から)

図版14



1. 釣山2号墳第3主体部遺物出土状況(東から)



2. 同(北から)



1. 釣山 2号墳埴輪列検出状況(西から)



2. 同(東から)

図版16



1. 釣山2号墳墳頂肩部埴輪基部検出状況(南から)



2. 同(北から)



1. 釣山2号墳遺物出土状況(南東から)



2. 同(南から)

図版18



1. 釣山2号墳遺物出土状況(西から)



2. 同(西から)



1. 釣山2号墳遺物出土状況(南から)



2. 同(東から)

図版20



1. 釣山2号墳遺物出土状況(北から)



2. 同(北から)



1. 釣山34号墳調査前(西から)



2. 同 調査後(西から)

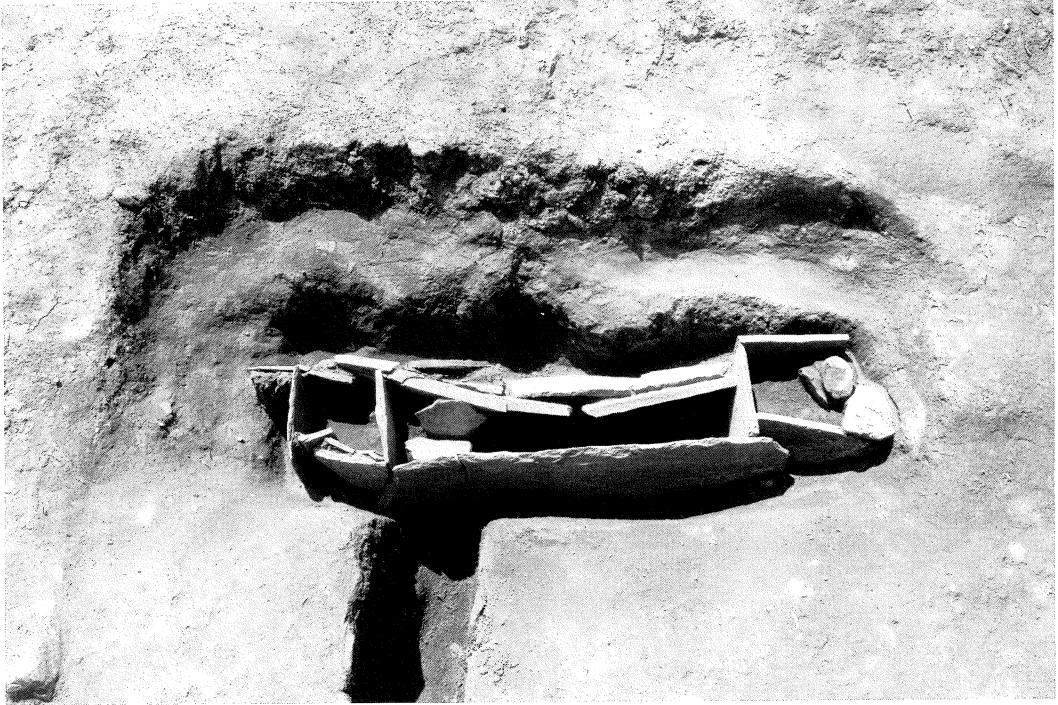
図版22



1. 釣山34号墳主体部検出状況(左. 第2, 右. 第1主体部/南から)



2. 同 完掘後(左. 第2, 右. 第1主体部/南から)



1. 釣山34号墳第1主体部蓋石除去後(東から)



2. 同 墓壙完掘後(北から)

図版24



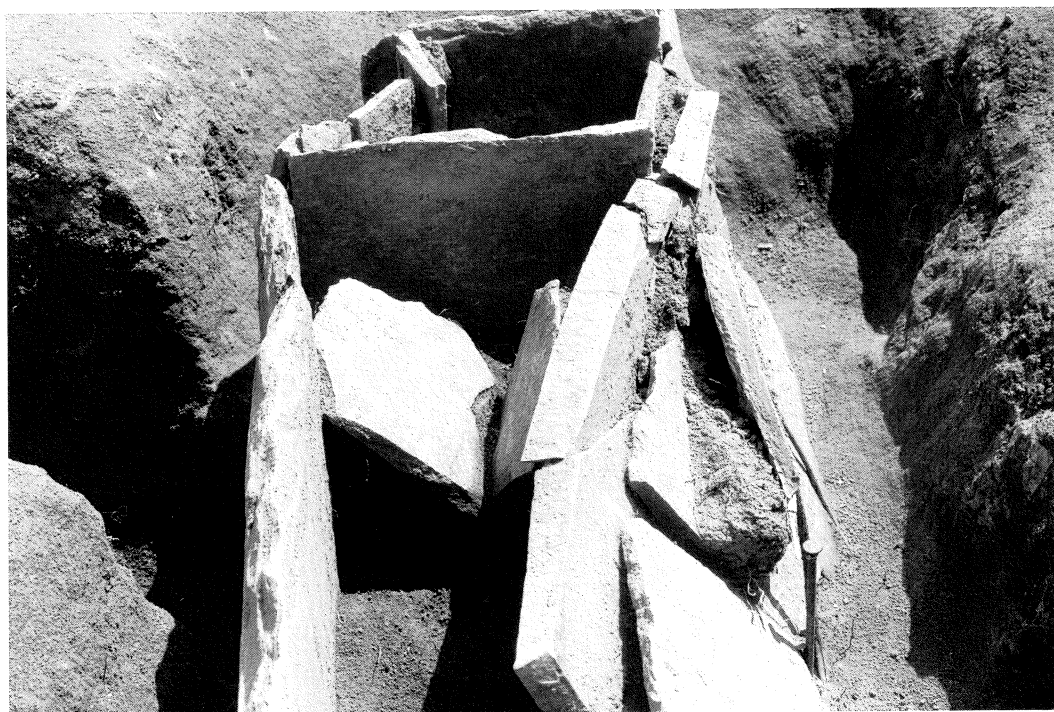
1. 釣山34号墳第2主体部南側副室(北から)



2. 同 北側副室(北から)



1. 釣山34号墳第2主体部南側部分(東から)



2. 同 枕石検出状況(北から)

図版26



1. 釣山35号墳調査前(西から)



2. 同 表土除去後(西から)

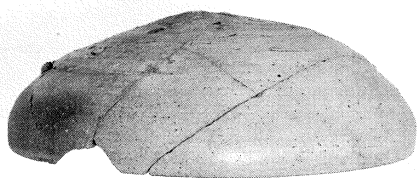


1. 釣山35号墳西側溝断面(北から)

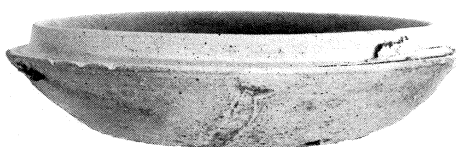


2. 同 墳丘断面(北西から)

图版28



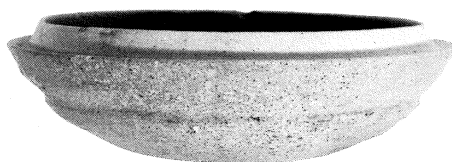
7-1



7-3



7-2



7-4



9-5~8



9-9~13



9-14



9-15

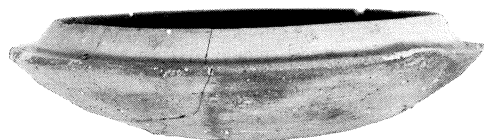
釣山2号墳第1主体部出土遺物



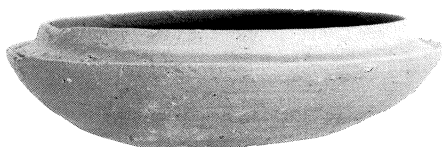
10-1



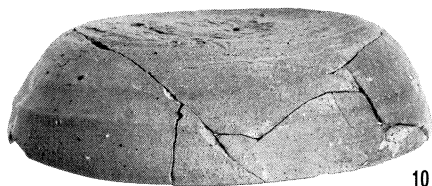
10-3



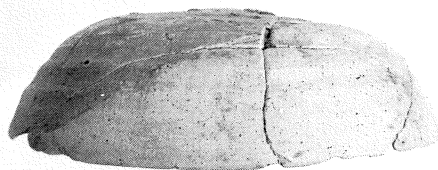
10-2



10-4



10-5



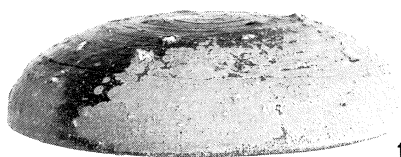
10-7



10-6



10-8



10-9



10-10



10-12

釣山2号墳第2主体部出土遺物(1)

図版30



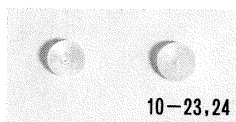
10-11



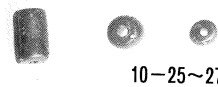
10-13



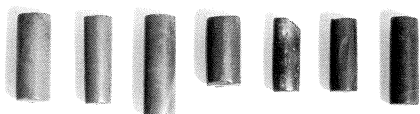
10-14, 15



10-23, 24



10-25~27



10-16~22



10-28
10-29



11-30



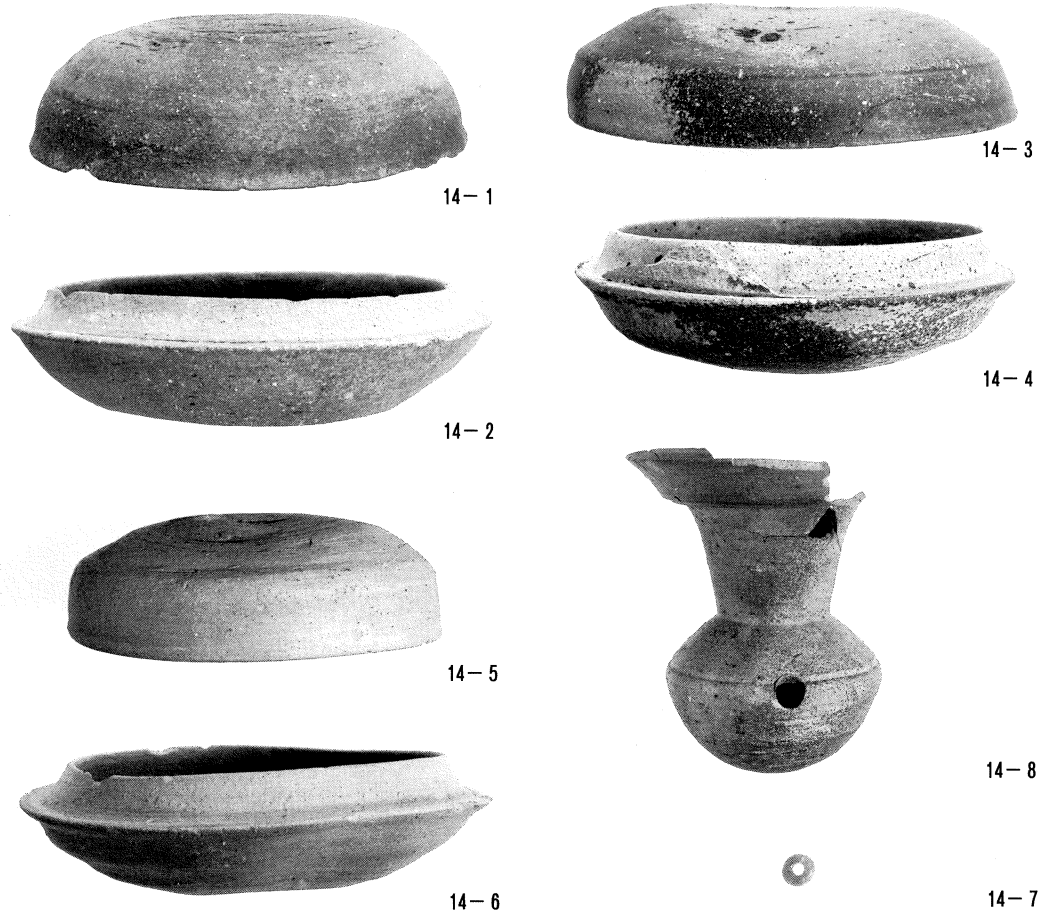
11-32



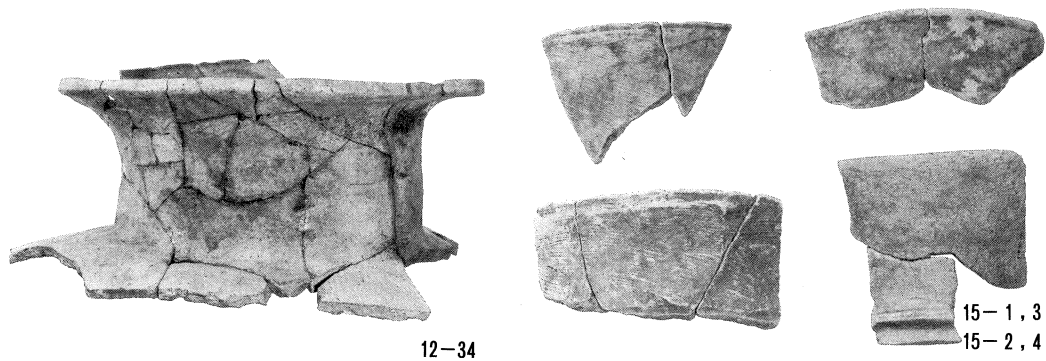
11-31



11-33



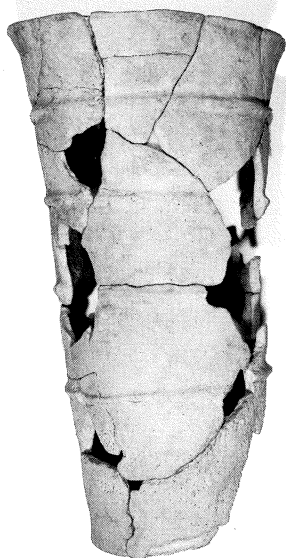
1. 釣山2号墳第3主体部出土遺物



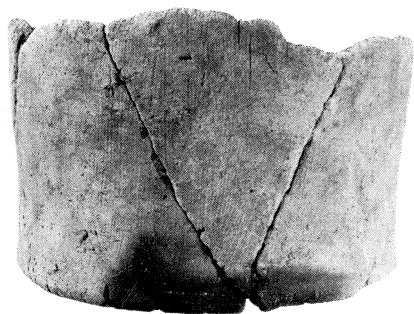
2. 釣山2号墳第2主体部直上出土遺物

3. 釣山2号墳墳丘出土遺物(1)

图版32



16-6



16-7



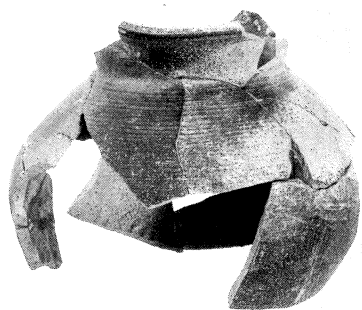
16-8



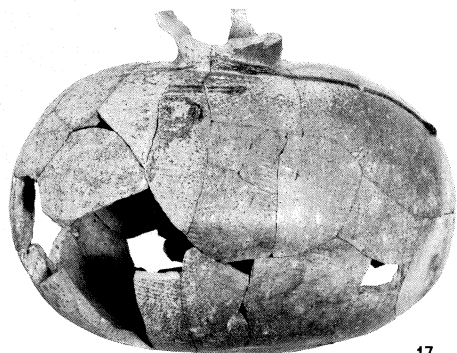
16-9



17-1

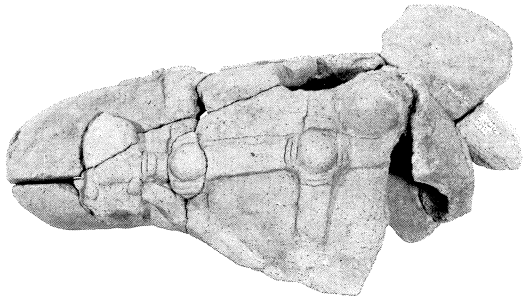


17-2



17-3

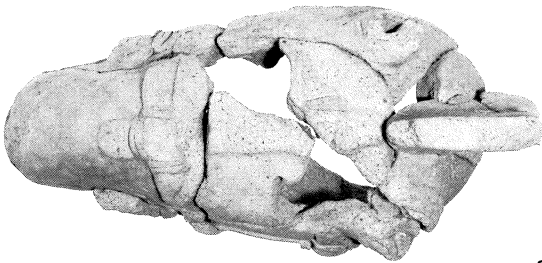
釣山 2 号墳墳丘出土遺物(2)



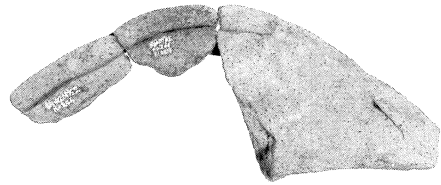
a



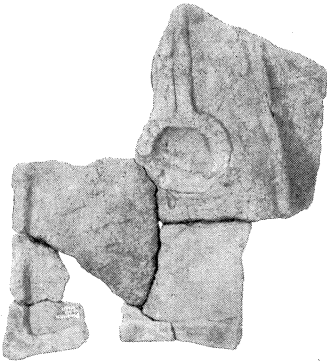
a



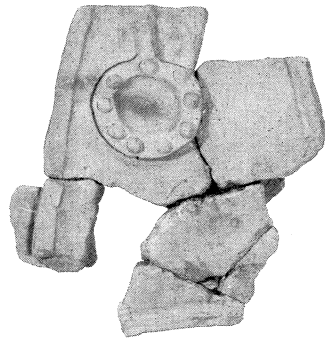
a



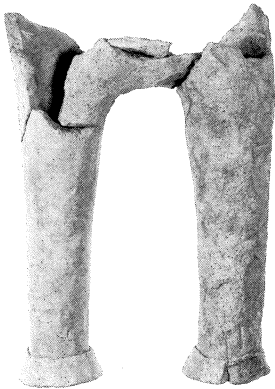
b



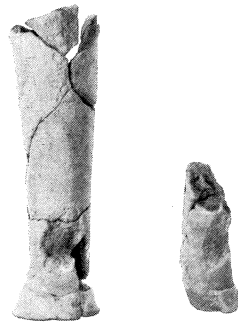
c



d



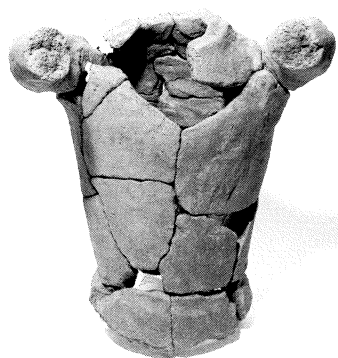
e



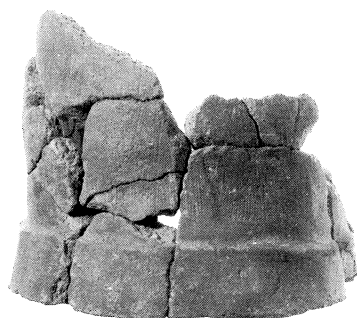
f

釣山2号墳丘出土遺物(3) (馬形埴輪=a 頭部、b~d 鞍、e・f 脚)

図版34



g



k



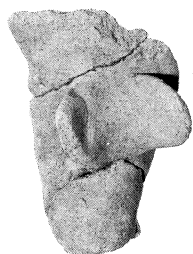
h



i



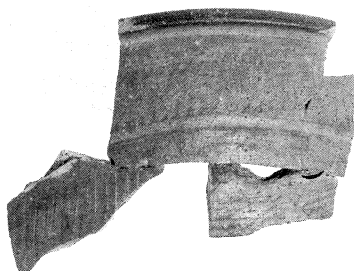
j



l



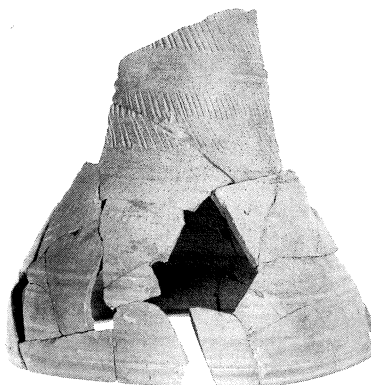
m



25-2



n



25-2

1. 釣山2号墳填丘出土遺物(4)
(人物=g 体部、h~j 腕;k 基部;l~n 形象埴輪片)

2. 釣山35号墳出土遺物

鳥取市文化財報告書 32

釣山古墳群発掘調査概報Ⅱ

平成4(1992)年 3月 印刷・発行

編集・発行 **鳥取市遺跡調査団**

印刷所 日ノ丸印刷株式会社
